

(財)北九州市芸術文化振興財団
委託調査

北九州芸術劇場
事業評価調査
[報告書]

6

2010年3月
ニッセイ基礎研究所

◎ はじめに

この報告書は、(財)北九州市芸術文化振興財団から委託を受けて、ニッセイ基礎研究所が実施した「北九州芸術劇場 事業評価調査(その6)」の成果をとりまとめたものである。

近年、行財政改革や説明責任(アカウンタビリティ)への関心の高まりなどを背景に、政府や公共団体の施策や事業を評価する「政策評価」が広がっており、地方公共団体においても、政策評価から施策評価、事務事業評価という評価体系が定着している。また、公の施設については2003年度から指定管理者制度が導入され、指定管理者が運営する施設では、指定管理者評価制度による評価が実施されているが、こうした評価制度の中では、多くの施設が、稼働率や入場者数、事業収支といった統一的なデータで評価されているのが実情である。

一方で、文化施設や文化事業の評価には、その特性を踏まえた独自の評価体系や指標が必要であるという認識が広がってきている。北九州芸術劇場は、2003年度の開館年度から独自の事業評価調査に継続的に取り組み、かつ、その成果を公開しており、公立文化施設の事業評価モデルとして全国から注目されている。

6年目にあたる2008年度調査では、継続調査として①劇場の運営データの分析、②主催事業および提携・協力事業公演の観客アンケート調査、③貸館利用に関するアンケート調査、④経済波及効果とパブリシティ効果の試算を実施した。また、テーマ調査として劇場スタッフへのグループインタビューを実施し、劇場のミッション(事業コンセプト)や事業評価の浸透の状況や日頃の業務への取り組み状況への意見などについて、忌憚ない話をうかがった。

6年間の継続的な調査結果からは、北九州芸術劇場が着実に成果をあげ、北九州市の芸術文化の創造拠点・発信拠点として、鑑賞者や利用者、さらに全国の劇団やカンパニー等から広く認知、支持されていることがうかがえる。こうした劇場の高い評価を支えているのは劇場スタッフ一人ひとりの熱意と工夫であることを、今年度のグループインタビュー調査であらためて実感した。

末筆ではあるが、2003年度以降、6ヶ年にわたり、この貴重な調査の機会を与えていただいた(財)北九州市芸術文化振興財団、劇場スタッフの方々、ならびに調査にご協力いただいた観客や利用者の方々、そして、今年度の事業評価調査にご協力を頂いた東京芸術大学教授・熊倉純子氏に心より感謝申し上げるとともに、本調査の成果が今後の北九州芸術劇場の運営に有効に活用され、より一層、意義のある事業や活動が展開されることを願うものである。

2010年3月
ニッセイ基礎研究所
芸術文化プロジェクト室

序章 調査研究の目的・内容と本報告書の構成

1. 調査研究の目的・内容

(1) 調査研究の目的

本調査研究は、2003年8月に開館した北九州芸術劇場について、毎年、各事業の成果を幅広い視点から評価するとともに、その評価結果に基づいて、より良い劇場運営のあり方を検討することを目的としている。

6年目にあたる2008年度は、03年度あるいは04年度から継続して実施している、次の4つの調査(「継続調査」)

- ①劇場運営に関する基礎データの収集・分析
- ②公演に来場した観客を対象としたアンケート調査による公演事業に関する評価
- ③貸館利用者を対象としたアンケート調査による施設利用に関する評価
- ④北九州芸術劇場の経済波及効果とパブリシティ効果の算出

を実施した。さらに08年度の「テーマ調査」として、

- ⑤北九州芸術劇場のスタッフへのグループインタビュー
を行い、劇場運営や事業実施における現場からの意見を整理した。

なお、本年度は、北九州芸術劇場が、(財)地域創造の「平成21年度公立ホール政策評価アドバイザー派遣事業」を実施したことを受け、同事業と連携し、「公立文化ホール・公立劇場の評価指針」(平成19年3月)の評価フレームを活用し、上記①～⑤の調査結果をとりまとめた。

(2) 調査の内容

①劇場運営基礎データの収集・分析

事業数、公演回数、入場者・参加者数、施設稼働率など、劇場運営に関する基礎データを整理し、03年度から6ケ年の経年分析を行なった。

②公演に来場した観客に対するアンケート調査の実施

北九州芸術劇場の自主事業と提携・協力事業公演の観客を対象に、以下の2つの視点に基づいたアンケート調査を実施した(詳細は、p.資-1～資-54参照)。

- 事業評価の基礎となる北九州芸術劇場の施設やサービス、公演内容等に関する観客の満足度、ニーズの把握
- 劇場運営の基礎となる観客の属性(年齢、性別、居住地)、北九州芸術劇場における鑑賞行動(情報入手経路、鑑賞の動機、北九州芸術劇場での鑑賞回数)、日頃の鑑賞行動(鑑賞頻度、鑑賞ジャンルなど)など、観客特性の把握

③貸館利用者を対象としたアンケート調査の分析

貸館利用者を対象に05年度から実施している「施設利用に関するアンケート調査」の結果について、08年度分をとりまとめた(詳細は、p.資-55～資-79参照)。

④経済波及効果、パブリシティ効果の把握分析

産業連関表を用いて、劇場の事業や運営がもたらす経済波及効果を試算するとともに、雇用効果の把握を行なった(詳細は、p.資-81～資-93参照)。また、パブリシティ効果について、

その概要を整理し、金額換算による規模を算出した(詳細は、p.資-95～資-102参照)。

⑤劇場スタッフへのグループインタビューの実施

劇場運営や事業に関する事業評価や今後の運営の改善等につなげるため、劇場スタッフへのグループインタビューを実施した。

実施にあたっては、業務別に、①事業係、②制作係、③学芸係、④技術課、⑤広報係、⑥営業係・総務係票券担当、⑦施設係利用担当(貸館)の7グループに分け、それぞれ3～5名のメンバーを対象に、以下の内容についてインタビューを行った(詳細は、p.資-103～資-109参照)。

- 劇場のミッションに対する認識・意見
- 劇場運営の中での担当業務の位置付け、役割
- 業務に関する課題、その改善策や新しい提案
- 今後の劇場の方向性、劇場運営、事業評価に関する自由な意見

なお、グループインタビューの実施にあたっては、(財)地域創造の実施する「平成21年度公立ホール政策評価アドバイザー派遣事業」と連携し、同事業において北九州芸術劇場のアドバイザーを担当された熊倉純子氏にご協力を頂いた。

2. 本報告書の構成

本報告書は、各調査結果の概要、ならびに事業評価の基本フレームと評価結果を整理した「本編」と、調査の詳細データ等を整理した「資料編」の二編から構成されており、それぞれの内容は以下のとおりである。

(1) 本編

本編は、それぞれ次の内容からなる6つの章によって構成されている。

- 「第1章 2008年度事業の概要と実績」
劇場運営の基礎データならびに事業収支を整理した。
- 「第2章 観客の特性と観客からみた評価」
自主事業・提携事業公演に会場した観客に対するアンケート調査の結果から、①観客の属性、②公演や劇場に関する意見(公演やサービスへの満足度など)、③日頃の鑑賞行動について、整理・分析を行った。
- 「第3章 貸館利用者からみた評価」
貸館利用者に対するアンケート調査の結果から、①劇場の施設、運営や対応に関する満足度、②重視項目について、調査結果の整理・分析を行った。
- 「第4章 経済波及効果とパブリシティ効果」
産業連関表を用いた経済波及効果、雇用効果、新聞掲載記事の金額換算によるパブリシティ効果を算出した。
- 「第5章 劇場運営・事業実施における現場からの意見」
7グループのインタビューから得られた劇場運営や事業実施における劇場スタッフの意見を、総合的に整理した。
- 「第6章 評価フレームに基づいた事業評価結果」
第1章から第5章までの調査結果を総合的に分析するため、次の評価フレームに沿って調査や評価の結果、改善のポイントなどを整理した。

A 劇場の設置目的:

鑑賞系事業、創造系事業、普及系事業、市民文化活動の支援、地域への貢献

B 運営・管理: 場の提供・支援、施設のホスピタリティやサービス、施設の維持管理

C 経営: 経営体制、リサーチ&マーケティング、経営努力

なお、昨年度調査までは、事業評価の基本フレームとして「劇場の計画目標に関する評価」、「劇場の運営状況に関する評価」、「劇場の経営状況に関する評価」、「劇場運営に伴う派生的効果に関する評価」の4項目を設定していたが、今年度の事業評価調査は、(財)地域創造の「平成21年度公立ホール政策評価アドバイザー派遣事業」と連携して実施したため、同事業で活用された「公立ホール・公立劇場の評価指針」(平成19年3月)で設定された3つの「戦略・評価軸」に基づいて、評価フレームを設定した。

(2) 資料編

本編で整理・分析した調査の手法、結果などをとりまとめ、資料編として掲載した。

- 資料Ⅰ「観客調査結果」では、08年度の自主事業と提携・協力事業公演に会場した観客を対象に実施したアンケート調査結果を、設問ごとに整理した。
- 資料Ⅱ「貸館利用者調査結果」では、05年度～08年度の4ケ年の調査結果を、設問ごとに整理した。
- 資料Ⅲ「経済波及効果」では、08年度の経済波及効果の基本構造、事業ごとの最終需要と消費支出など、経済波及効果、雇用効果算出のための分析資料を掲載した。
- 資料Ⅳ「パブリシティ一覧」では、金額換算の基礎となった08年度の新聞記事データの一覧を掲載した。
- 資料Ⅴ「劇場スタッフを対象としたグループインタビュー結果(概要)」では、グループインタビューの記録を整理して掲載した。

◎ 調査研究体制

(財)地域創造「平成21年度公立ホール政策評価アドバイザー派遣事業」アドバイザー

熊倉純子(東京芸術大学音楽環境創造科 准教授※)

※グループインタビュー実施時の肩書き

ニッセイ基礎研究所

柄田明美(芸術文化プロジェクト室 研究員)

吉本光宏(芸術文化プロジェクト室長)

北九州芸術劇場
事業評価調査
[本編]

第1章 2008年度事業の概要と実績

本章ではまず、事業評価の基本となる北九州芸術劇場の事業の概要、入場者数や稼働率、収支状況など、2008年度の事業の実績について、過去データとともに整理した。

1. 事業の実績

まず、北九州芸術劇場の事業の基本方針と08年度の事業概要は次のとおりである。

(1) 事業の基本方針

北九州芸術劇場では、「創る」「育つ」「観る」をキーワードにした事業展開が行われている。それぞれの目的や考え方、事業の内容は次のとおりである。

- **【創る】**:北九州芸術劇場のオリジナル・プロデュースの演劇作品を創ることにより、“ものづくりの街”北九州市をアピールし地域の活性化を促していく。
- **【育つ】**:アーティストを小・中学校等に派遣するアウトリーチ活動や劇場サポーター組織を通じてのヒューマンネットワーク作り等により、舞台芸術の手法を用いた人材育成・教育普及事業を行い、地域を育てながら地域とともに育っていく劇場を目指す。
- **【観る】**:見る楽しみを知ってもらうため、国内外のエンターテインメント性や芸術性の高い作品を招き、市民に様々な公演を提供する。

(2) 事業の内容と実績、入場者数

- 08年度もこうした3つのコンセプトに基づき、自主事業全体で、34本の事業・393回の公演数・アクティビティが行われ、46,645人が公演鑑賞やアクティビティに参加した(図表1-1)。
- 以下、「創る」「育つ」「観る」それぞれの事業ごとに、事業の内容と実績をとりまとめた。(03～08年度の事業実績の概要を図表1-1に、08年度事業の実績一覧を図表1-2に整理した。)

図表1-1 事業実績の概要(03年度～08年度)

【事業数・公演数・入場者数】

	2003年度			2004年度			2005年度			2006年度			2007年度			2008年度		
	事業数	公演数	入場者数															
創造事業	3	35	13,350	4	15	3,292	6	45	9,332	7	61	27,107	5	24	5,224	13	41	12,320
公演事業	15	35	22,079	23	46	26,361	24	42	21,294	18	45	29,813	22	49	32,378	15	33	18,164
提携・協力事業	5	8	7,382	6	15	6,211	6	13	6,642	7	16	7,259	11	28	11,869	5	12	3,895
オープニング企画	2	2	1,592	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
演劇祭	2	9	987	2	9	1,231	2	7	2,779	2	8	1,110	3	8	1,724	1	28	1,689
公演事業計	27	89	45,390	35	85	37,098	38	107	40,047	34	130	65,289	41	109	51,195	34	114	36,068

	事業数	回数	参加者数															
学芸事業	—	219	2,404	—	320	4,734	—	297	6,327	—	291	6,758	—	283	6,200	—	279	10,577
総合計	27	308	47,794	35	405	41,829	38	404	46,374	34	421	72,047	41	392	57,395	34	393	46,645

【総座席数と入場率】

	総席数	入場率										
公演事業	50,756	89.4%	41,808	88.7%	48,575	82.4%	70,065	92.7%	60,036	85.3%	41,580	82.7%

※2008年度は、演劇祭は総座席数の設定をしていないため、演劇祭入場者数は、入場率の算出から除いている。

①創る:創造事業

- 「創る」に対応した創造事業では、
 - 期間限定で劇団を作り、公募による参加者が講座・ワークショップで学びながら劇団として創造を体験する「シアターラボ」、「シアターコラボ」
 - 演劇界の第一線で活躍する演出家と地域の俳優の出演で、国内外の魅力的な戯曲をリーディングとして上演する「リーディングセッション」
 - 北九州芸術劇場プロデュースとして全国に発信する作品、「A MIDSUMMER NIGHT'S DREAM」、「風街」
 - 市民参加型の創造事業である、合唱物語「わたしの青い鳥2008」、「北九州パントマイムフェスティバル」、「幕末恋歌 幾松と小五郎」といった事業が実施された。
- 「A MIDSUMMER NIGHT'S DREAM」は北九州(2回)・東京(8回)・大阪(3回)、「風街」は北九州(7回)・東京(3回)での公演が行われた。
- 08年度は8事業で41回の公演が行われ、入場者数は12,320人となっている。07年度と比べると、公演数が増え、あわせて入場者数も増えている(図表1-1)。
- 創造事業は入場率が高いプログラムが多く、「シアターラボ」、「パントマイムフェスティバル」、「シアターコラボ」の入場率は90%以上、「リーディングセッション」と合唱物語「わたしの青い鳥」も入場率はともに89%と、市民からの支持の高さがうかがえる。(図表1-2)。なお、「シアターコラボ」は08年度からの新規事業である。

②育つ:学芸事業

- 「育つ」に対応した学芸事業では、
 - ワorkshopや講座等の事業として、「バックステージツアー」、「チャレンジ! えんげき」、「劇場塾」、「高校生のための演劇塾」など
 - アウトリーチ事業として、小学校での「表現教育推進事業」や「学校出前演劇ワークショップ」、中学生と指導者を対象とした「公共ホール演劇ネットワーク事業」など学校を対象とした事業と、ダンスや演劇のワークショップなど
 - 創造参加として、「シアターラボ」、「シアターコラボ」、合唱物語「わたしの青い鳥」、「北九州パントマイムフェスティバル」
- など、学芸事業全体では、創造参加も含め、18事業で279回のアクティビティが実施され、参加延人数・入場者数は10,577人となっている(図表1-1)。08年度は、盲・聾学校や医療センターをはじめ、外に出向いていくアウトリーチ型のアクティビティが増えている。
- なお、学芸事業における延べ参加者数・入場者数を受講(入場)者数でカウントすると、学芸事業の受講(入場)者数は4,248人(←延べ:8,269人)、創造参加の受講(入場)者数は134人(←延べ:2,308人)となり、合計で4,382人となる。07年度以前は、受講(入場)者数のみのカウントなので、07年度以前の数字との比較には、留意が必要である(図表1-2)。

③観る:公演事業

- 「観る」に対応した主催公演事業では、人気の高い商業演劇・ミュージカル公演からチェルフィッチュの「フリータイム」、「イッセー尾形の一人芝居」などの小劇場・現代演劇公演、山海塾のダンス・現代舞踊公演、「月猫えほん音楽会」や「のび太とアニマル惑星」といった子どもを対象とした公演など、幅広い観客層を対象とした公演が実施された。
- 公演事業では15作品が上演され、公演数は33回、入場者数は18,164人となっている。07

年度と比べると、公演数が少なくなく、あわせて入場者数も少なくなっている(図表1-1)。しかし、公演事業の入場率は84.9%と全般的に高く、15本のうち7本は90%以上を確保している(図表1-2)。

- 提携・協力事業では、伝統芸能や小劇場・現代演劇など5作品が上演され、公演数は12回であった。07年度と比べると、公演数が少なく、併せて入場者数も少なくなっている(図表1-1)。
- 創造事業、公演事業、提携事業、フェスティバルを含めた公演事業全体の公演作品数は34本、公演数は114回、入場者数は36,068人である。

図表1-2 北九州芸術劇場 自主事業実績一覧(08年度)

1 創造事業

	公演名	会場	公演日	公演数	設定席数	入場者数	入場率
1	北九州芸術劇場リーディングセッションvol.11「伝染病」	小劇場	4/26・27	2	272	237	87%
	北九州芸術劇場リーディングセッションvol.12「ワーニヤ伯父ちゃん」	小劇場	7/12・13	2	268	242	90%
	北九州芸術劇場リーディングセッションVol.13「裸でスキップ」	小劇場	11/15・16	2	272	247	91%
	計			6	812	726	89%
2	シアターラボ2008	小劇場	5/24・25	3	320	307	96%
3	合唱物語「わたしの青い鳥」2008	中劇場	6/22	1	423	378	89%
4	「A MIDSUMMER NIGHT'S DREAM」北九州公演	中劇場	6/7・8	2	1,210	1,102	91%
	「A MIDSUMMER NIGHT'S DREAM」大阪公演	シアター・ドラマシティ	6/13～15	3	2,658	2,159	81%
	「A MIDSUMMER NIGHT'S DREAM」東京公演	東京芸術劇場	6/22～29	8	5,928	4,484	76%
	計			13	9,796	7,745	79%
5	第6回北九州パントマイムフェスティバル	小劇場	10/11～13	4	688	639	93%
6	市民参加公演「幕末恋唄 幾松と小五郎」	中劇場	11/29・30	2	1,200	1,014	85%
7	シアターコロボ2008	創造工房	12/21	2	111	111	100%
8	風街「北九州公演」	小劇場	2/25～3/1	7	901	823	91%
	風街「東京公演」	あうるすぽっと	3/6～8	3	687	577	84%
	計			10	1,588	1,400	88%
計				41	14,938	12,320	82%

2 公演事業

	公演名	会場	公演日	公演数	設定席数	入場者数	入場率
1	チェルフィッチュ「フリータイム」	小劇場	4/4・5	2	352	321	91%
2	月猫えほん音楽会2008	中劇場	7/30	1	600	599	100%
3	ドラえもん「のび太とアニマル惑星」	中劇場	8/2～3	3	1,689	1,263	75%
4	「SISTERS」	中劇場	8/7～10	5	2,960	2,494	84%
5	「ウエディング・ママ」	大ホール	8/16～17	2	2,426	1,779	73%
6	「ガラスの仮面」	大ホール	9/5～7	3	3,498	2,862	82%
7	山海塾「降りくるもののなかで-とぼり」	中劇場	9/20・21	2	1,210	870	72%
8	「サド侯爵夫人」	中劇場	11/2	1	612	621	101%
9	「どんまいマインド」	中劇場	11/8・9	2	1,232	1,054	86%
10	イッセー尾形とまらない生活2008 in 秋の小倉	中劇場	11/22・23	2	1,242	1,098	88%
11	アパートメントハウス1776	響ホール	11/30	1	624	401	64%
12	「ラ・カージュ・オ・フォーレ」	大ホール	1/9～11	3	3,267	3,204	98%
13	公共ホール演劇ネットワーク事業「なつざんしょ...夏残暑-」	小劇場	1/17・18	2	232	219	94%
14	ラッパ屋公演「ブラジル」	小劇場	1/31・2/1	2	260	254	98%
15	「パンク侍、斬られて候」	中劇場	2/14・15	2	1,184	1,125	95%
計				33	21,388	18,164	85%

3 北九州演劇フェスティバル

	公演名	会場	公演日	公演数	設定席数	入場者数	入場率
1	北九州演劇フェスティバル	スミックスESTAほか	3/7～29	28	-	1,689	-

4 提携・協力事業

	公演名	会場	公演日	公演数	設定席数	入場者数	入場率
1	イッセー尾形のこれからの生活2008 in 春の小倉	中劇場	5/30	1	621	362	58%
2	立川志の輔独演会	大ホール	9/12	1	1,269	1,122	88%
3	松竹大歌舞伎	大ホール	9/14	2	2,468	1,635	66%
4	飛ぶ劇場「有限サーフライダー」	小劇場	10/23～26	6	648	525	81%
5	MONO公演「床下のほら吹き男」	小劇場	3/7・8	2	248	251	101%
計				12	5,254	3,895	74%

合計(創造・公演・演劇フェスティバル・提携事業)				114	41,580	36,068	83%
--------------------------	--	--	--	-----	--------	--------	-----

※%の算出から、北九州演劇フェスティバルの入場者数を除いている。

5 学芸事業

	事業名	会場	実施月	回数	対象	参加延 人数・入 場者数	受講(入 場)者数
(ワークショップ参加)							
1	バックステージツアー「劇場〇秘報告・・・大ホールの謎を追え」	大ホール	8/20～22	8	小学1年生～一般	233	-
	バックステージツアー「劇場〇秘報告・・・中劇場の謎を追え」	中劇場	12/6・7	6	小学1年生～一般	172	-
	計			14		405	-
2	チャレンジ! えんげき2008	小劇場	7/21～27	6	小学3～6年生	180	30
	〃 発表	小劇場	7/27	1	一般	102	102
	計			7		282	132
3	コンテポラリーダンス普及「月1ダンス部」	稽古場、 大手町練習場	7/5～3/22	24	一般	518	518
4	劇場塾(戯曲講座)	稽古場	8/29・9/12・ 10/3・11/3	4	一般	48	12
	劇場塾(俳優講座)	稽古場	11/7・8・9	3	一般	51	17
	計			7		99	29
5	高校生のための演劇塾	大ホール・中劇場・ 小劇場・稽古場	8/6～8	30	高校生	534	89
6	北九州でつくるワークショップ	稽古場	9/7～3/1	11	一般/アウト リーチ経験 者	174	122
7	表現教育推進事業(実践・鴨生田小学校-I)	小学校	6～3月	4	小学4年生	288	72
	表現教育推進事業(実践・鴨生田小学校-II)	小学校	6～3月	16	小学5年生	1,216	76
	表現教育推進事業(実践・鴨生田小学校-III)	小学校	6～3月	7	小学6年生	553	79
	表現教育推進事業(実践・松ヶ江南小学校-I)	小学校	6～3月	4	小学4年生	328	82
	表現教育推進事業(実践・松ヶ江南小学校-II)	小学校	6～3月	4	小学5年生	240	60
	表現教育推進事業(実践・松ヶ江南小学校-III)	小学校	6～3月	5	小学6年生	395	79
	表現教育推進事業(実践・鞘ヶ谷小学校-I)	小学校	6～3月	4	小学4年生	184	46
	表現教育推進事業(実践・鞘ヶ谷小学校-II)	小学校	6～3月	3	小学5年生	126	42
	表現教育推進事業(実践・鞘ヶ谷小学校-III)	小学校	6～3月	4	小学6年生	152	38
計				51		3,482	574

	事業名	会場	実施月	回数	対象	参加延 人数・入 場者数	受講(入 場)者数
8	北九州ドラマ創作工房 V	島郷市民センター	4/12～6/28	13	小学生～一般	429	33
	発表	小劇場	6/29	2	小学生～一般	194	194
	計			15		623	227
9	学校出前演劇ワークショップ「探検、危機一髪！」①	千代小学校	9/22	1	小学5年生	67	-
	学校出前演劇ワークショップ「探検、危機一髪！」②	花房小学校	9/24	1	小学5年生	45	-
	学校出前演劇ワークショップ「探検、危機一髪！」③	八枝小学校 I II	9/25	2	小学4年生	136	-
	学校出前演劇ワークショップ「探検、危機一髪！」④	八児小学校	9/26	1	小学5年生	59	-
	学校出前演劇ワークショップ「探検、危機一髪！」⑤	若園小学校 I	1/20	1	小学3年生	90	-
	学校出前演劇ワークショップ「探検、危機一髪！」⑥	若園小学校 II	1/20	1	小学4年生	83	-
	学校出前演劇ワークショップ「探検、危機一髪！」⑦	筒井小学校	1/21	1	小学4、5年生	80	-
	学校出前演劇ワークショップ「探検、危機一髪！」⑧	中原小学校	1/22	1	小学4年生	42	-
	学校出前演劇ワークショップ「探検、危機一髪！」⑨	折尾西小学校	1/23	1	小学4年生	109	-
	計			10		711	-
10	合唱物語「わたしの青い鳥」アクティブ(アウトリーチ)	北九州盲学校	6月	1	幼稚部 ～中学部	12	12
	合唱物語「わたしの青い鳥」アクティブ(アウトリーチ)			1		30	30
11	パントマイムアクティビティ(アウトリーチ)	小倉豊学校・医療センター・熊西小ほか17校	9月	20	幼・小・中・医療関係者・患者	1,205	1205
12	鴻上尚史ワークショップ(アウトリーチ)	大手町練習場	7月	1	中学生	29	29
13	白井剛ワークショップ(アウトリーチ)	高見小学校	9月	1	小学6年生	64	64
	白井剛ワークショップ(アウトリーチ)	大手町練習場	10月	1	一般	27	27
14	演劇ネットワーク事業 中学校(アウトリーチ)	尾倉中学校	1/13・14	2	中学2年生	51	51
	演劇ネットワーク事業 指導者向け(アウトリーチ)	大手町練習場	1月14日	1	一般	23	23
ワークショップ参加 計				197		8,269	4,248
(創造参加)							
15	シアターラボ2008(創造事業参加)	稽古場・創造工房	4/7～5/23	35	一般	455	13
16	シアターコラボ2008(創造事業参加)	稽古場	12/9～12/21	13	一般	273	21
17	合唱物語「わたしの青い鳥」2008(創造事業参加)	中劇場ほか	5～7月	14	小学3年生～一般	980	70
18	第6回北九州パントマイムフェスティバル(創造事業参加)	稽古場・小劇場	9～10月	20	小学4年生～一般	600	30
創造参加 計				82		2,308	134
合計(学芸事業)				279		10,577	4,382
総 計				393		46,645	

④貸館事業

- 貸館事業では、市主催事業、財団主催事業も含め、08年度に公演や講演など、計206事業が開催された。公演・講演数は306回、貸館事業の入場者数は164,556人となっている。

⑤利用者数、利用件数

- 観客だけではなく、主催事業の出演者や関係者、貸館事業の利用者などを含めた北九州芸術劇場の利用者数、利用件数は図表1-3のとおりで、08年度には自主事業、貸館事業合わせて1,731件の利用があり、利用者数は約28万人となっている。そのうち、自主事業での

利用件数は813件、利用者数は約5万人。貸館事業での利用件数は918件、利用者数は約23万人である。

- 07年度と較べて自主事業による利用件数が少なくなっている一方、貸館事業で増えており、自主事業と貸館事業を含めた合計は、利用者数、利用件数ともにほぼ例年どおりの数字となっている(利用件数:1,700~1,800件、利用者数:27~28万人)。

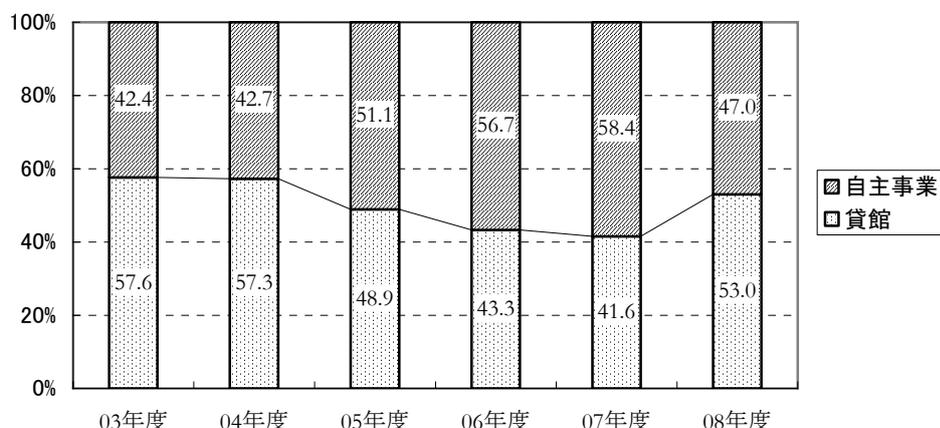
図表1-3 利用者数、利用件数(03年度~08年度)

	2003年度				2004年度				2005年度				累計
	大ホール	中劇場	小劇場	計	大ホール	中劇場	小劇場	計	大ホール	中劇場	小劇場	計	
自主事業	23,937 (66)	22,890 (143)	7,402 (121)	54,229 (330)	22,445 (87)	29,970 (242)	16,996 (404)	69,411 (733)	13,034 (102)	33,153 (289)	14,592 (471)	60,779 (862)	387,182 (4,823)
貸館事業	93,100 (205)	41,524 (145)	10,769 (99)	145,393 (449)	175,273 (482)	71,901 (325)	13,626 (176)	260,800 (983)	160,673 (467)	55,644 (229)	10,478 (130)	226,795 (826)	
合計	117,037 (271)	64,414 (288)	18,171 (220)	199,622 (779)	197,718 (569)	101,871 (567)	30,622 (580)	330,211 (1,716)	173,707 (569)	88,797 (518)	25,070 (601)	287,574 (1,688)	1,649,037 (9,537)
	2006年度				2007年度				2008年度				累計
	大ホール	中劇場	小劇場	計	大ホール	中劇場	小劇場	計	大ホール	中劇場	小劇場	計	
自主事業	26,027 (139)	29,814 (298)	15,651 (573)	71,492 (1,010)	34,015 (186)	29,182 (325)	17,837 (564)	81,034 (1,075)	17,877 (134)	17,699 (217)	14,661 (462)	50,237 (813)	387,182 (4,823)
貸館事業	134,966 (382)	55,050 (244)	8,853 (146)	198,869 (772)	132,444 (381)	58,491 (237)	10,772 (148)	201,707 (766)	133,686 (365)	77,324 (327)	17,281 (226)	228,291 (918)	
合計	160,993 (521)	84,864 (542)	24,504 (719)	270,361 (1,782)	166,459 (567)	87,673 (562)	28,609 (712)	282,741 (1,841)	151,563 (499)	95,023 (544)	31,942 (688)	278,528 (1,731)	1,649,037 (9,537)

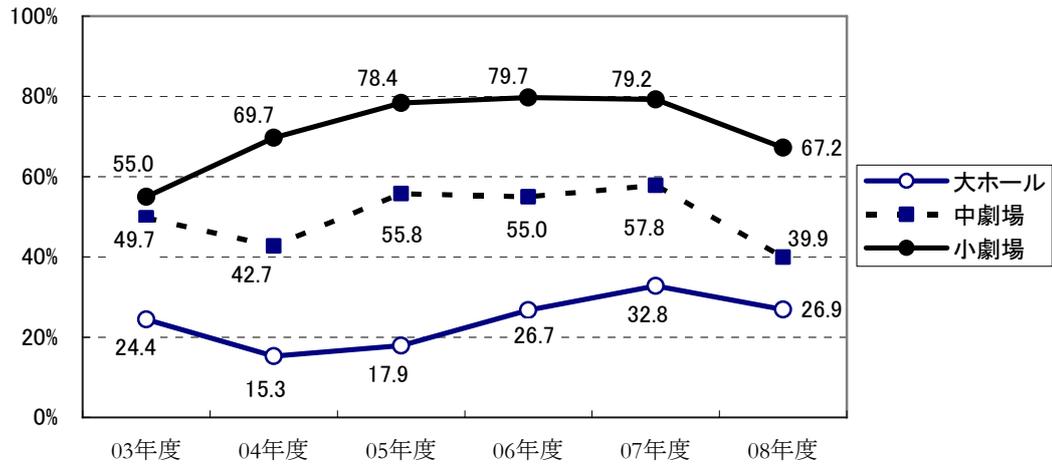
* 上段の数字が利用者数(単位:人)、下段()内の数字は利用件数

- 自主事業と貸館事業の比率を利用件数ベースで見ると、08年度は、自主事業が47.0%、貸館事業が53.0%と、貸館事業の利用割合が高くなっている(図表1-4)。
- ホールの規模別にみると、大ホールで貸館事業での利用が多く、中劇場と小劇場で自主事業の利用が多いことは、03年度からの変わらない傾向である(図表1-5)。
- 小劇場の自主事業比率が高いのは、リーディングセッションやシアターラボ・コラボをはじめとする創造事業・創造参加の場として活用しているためであり、3つの劇場それぞれの役割と用途が明確になっているものと考えられる。

図表1-4 自主事業・貸館事業比率 [件数ベース](03年度~08年度)



図表1-5 ホール別の自主事業比率 [件数ベース](03年度～08年度)



(3) 施設稼働率

- 北九州芸術劇場の08年度の施設稼働率は、大ホールが74.7%、中劇場が78.1%、小劇場が84.4%である(図表1-6)。
- 3つのホールの稼働率は、開館年の03年度を除き、約70～80%で推移しており、(財)地域創造の悉皆調査結果(07年9月1日時点でのデータ。専用ホールのうち政令市施設の平均稼働率は69.8%)と比較して高い水準にある。
- 小劇場は、06年度以降継続して80%以上の高い稼働率となっている。

図表1-6 北九州芸術劇場の稼働率(03年度～08年度)

	2003年度			2004年度			2005年度		
	大ホール	中劇場	小劇場	大ホール	中劇場	小劇場	大ホール	中劇場	小劇場
公演日数	99	100	83	219	207	220	223	189	222
利用対象日数	103	107	86	277	283	304	281	276	297
稼働率	96.1%	93.5%	96.5%	79.1%	73.1%	72.4%	79.4%	68.5%	74.7%

	2006年度			2007年度			2008年度		
	大ホール	中劇場	小劇場	大ホール	中劇場	小劇場	大ホール	中劇場	小劇場
公演日数	202	199	254	220	205	257	192	203	249
利用対象日数	285	282	306	290	289	300	257	260	295
稼働率	70.9%	70.6%	83.0%	75.9%	70.9%	85.7%	74.7%	78.1%	84.4%

注) 稼働率は「稼働日数/利用対象日数」、利用対象日数は保守点検日を除いたもの

2. 事業費の内訳と収支

次に、北九州芸術劇場の事業費の財源内訳と収支について、過去5ケ年と同様の分析を行った。

(1) 事業費の財源と事業支出の内訳

- 北九州芸術劇場の08年度の事業費は約3億2,200万円と、07年度に引き続き事業費からみた規模は小さくなっている。
- 財源内訳をみると、チケット収入が約1億3,600万円で全体の42.2%、市の補助金が約1億3,700万円42.4%、文化庁と(財)地域創造からの外部資金が約5,000万円15.4%と、チケット収入と外部資金で事業費の約6割(57.6%)をカバーしている(図表1-7)。

- 08年度は、自主事業の総座席数が少ないことを反映し、チケット収入の額・割合ともに07年度に較べて低くなっているものの(図表1-8)、全国平均の試算値^{*}と比較すると、08年度のチケット収入の割合、外部資金の獲得割合はともに試算値の平均を上回っている。チケット収入は、06年度:61.4%、07年度:52.4%、08年度:42.2%と継続して高い割合を占めており、劇場の営業努力がうかがえる。

※(財)地域創造の悉皆調査結果(2007年)から、指定管理施設の事業費の財源内訳の平均金額を試算すると、「設置者からの補助金・委託費」が52.7%、「事業収入」が36.6%、「設置者以外からの助成金・協賛金・寄付金」が10.7%である。

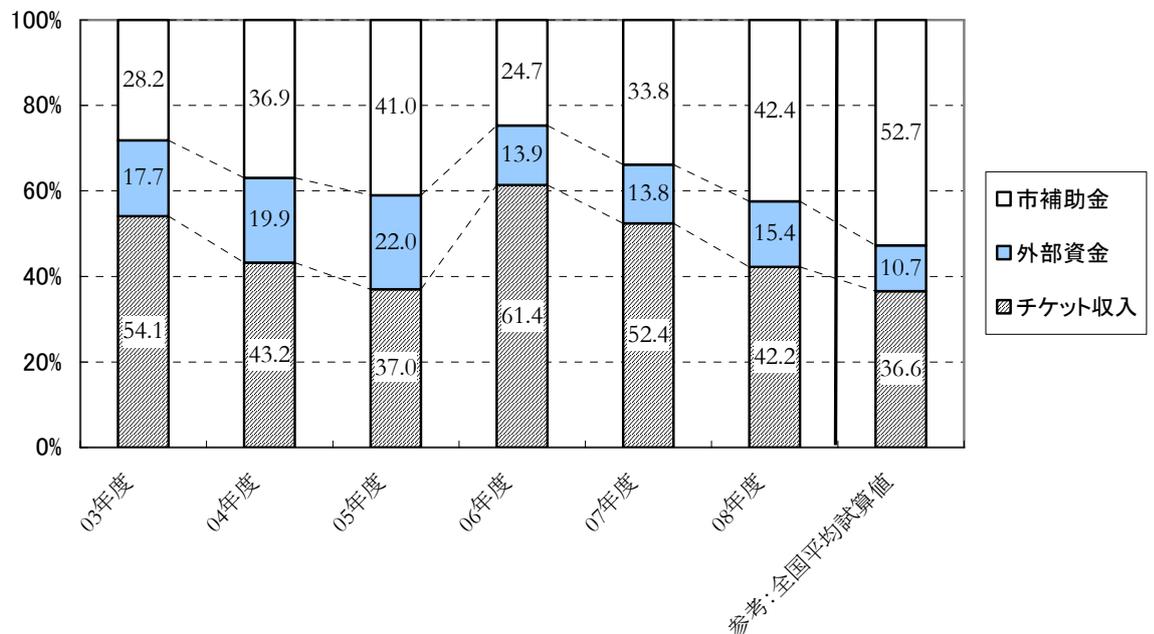
※指定管理施設の平成18年度決算金額平均値の「収入」欄から、「事業補助金」、「事業委託費」(いずれも設置者からの収入)、「事業収入」、「設置者以外からの助成金・協賛金・寄付金」の4項目を事業費財源と設定し、それぞれの内訳比率を算出した。

図表1-7 事業費の財源内訳(03年度～08年度)

(千円)

	2003年度		2004年度		2005年度		2006年度		2007年度		2008年度	
	金額	内訳	金額	内訳	金額	内訳	金額	内訳	金額	内訳	金額	内訳
チケット収入	215,389	54.1%	145,429	43.2%	110,060	37.0%	263,901	61.4%	197,355	52.4%	135,979	42.2%
市補助金	112,225	28.2%	124,198	36.9%	121,965	41.0%	106,363	24.7%	127,456	33.8%	136,854	42.4%
外部資金	70,700	17.7%	67,000	19.9%	65,295	22.0%	59,517	13.9%	52,051	13.8%	49,579	15.4%
文化庁	49,000	(12.3%)	49,000	(14.6%)	45,795	(15.4%)	45,800	(10.7%)	36,600	(9.7%)	27,400	(8.5%)
地域創造	10,000	(2.5%)	18,000	(5.3%)	19,500	(5.3%)	13,717	(3.2%)	15,451	(4.1%)	22,179	(6.9%)
日本財団	11,700	(2.9%)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	398,314	100.0%	336,627	100.0%	297,320	100.0%	429,781	100.0%	376,862	100.0%	322,412	100.0%

図表1-8 事業費の比率(03年度～08年度)



(2) 事業収支

- 08年度の文化振興特別会計について、収入の部の決算報告をみると、予算額と決算額の差異は事業収入で約1億3,300万円、補助金等収入で約4,200万円となっており、07年度と較べて、08年度は両収入ともに差異が大きくなっている。

- 劇場の運営、事業の実施にあたって、経費節減の努力を行っていることとともに、積極的な営業努力を行なっていることがうかがえる。

図表1-9 事業収入、補助金等収入の予算額・決算額(03年度～08年度)

(千円)

	2003年度			2004年度			2005年度		
	予算額	決算額	差異	予算額	決算額	差異	予算額	決算額	差異
事業収入	194,300	215,389	△ 21,089	146,346	145,429	917	130,500	110,060	20,440
下段:全体に占める割合	48.6%	54.1%	—	41.1%	43.2%	—	37.3%	37.0%	—
補助金等収入	205,700	182,925	22,775	209,300	191,198	18,102	219,500	187,260	32,240
	51.4%	45.9%	—	58.9%	56.8%	—	62.7%	63.0%	—
市補助金	135,000	112,225	22,775	135,000	124,198	10,802	151,000	121,965	29,035
助成金	70,700	70,700	0	74,300	67,000	7,300	68,500	65,295	3,205

	2006年度			2007年度			2008年度		
	予算額	決算額	差異	予算額	決算額	差異	予算額	決算額	差異
事業収入	265,709	263,901	1,808	212,173	197,355	14,818	269,172	135,979	133,193
	53.9%	61.4%	—	50.2%	52.4%	—	54.1%	42.2%	—
補助金等収入	227,531	165,880	61,651	210,800	179,507	31,293	228,412	186,433	41,979
	46.1%	38.6%	—	49.8%	47.6%	—	45.9%	57.8%	—
市補助金	145,000	106,363	38,637	149,000	127,456	21,544	149,000	136,854	12,146
助成金	82,531	59,517	23,014	61,800	52,051	9,749	79,412	49,579	29,833

第2章 観客の特性と観客からみた評価

本章では、開館以来継続的に実施している、主催事業および提携・協力事業の公演に会場した観客に対するアンケート調査の結果から、2008年度の観客の特性や、観客からみた北九州芸術劇場に対する評価を整理、分析した。

1. 観客調査の実施要領

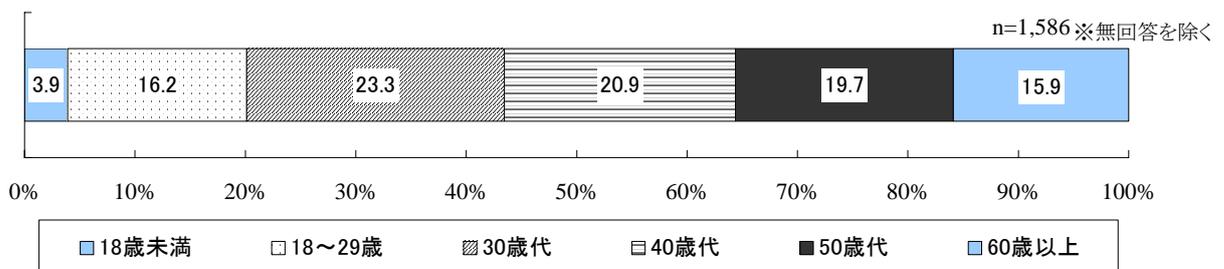
- 調査の対象： 08年度に実施した主催事業および提携・協力事業公演 26公演
- 配布・回収方法： 各公演初日の開演時に配布、終演時に回収
- 実施時期： 08年4月4日～09年3月7日
- 有効回答数： 1,732件、回収率：16.0%（配布数：10,839件）。

2. 観客調査の結果概要

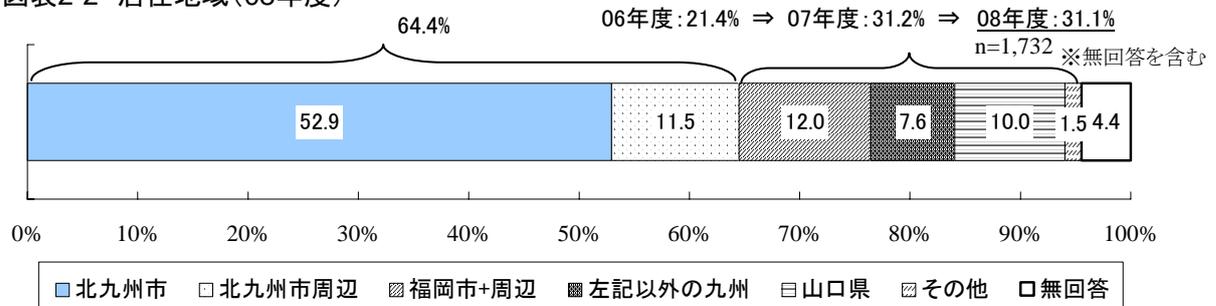
(1) 観客(アンケート回答者)の属性 (p.資-10～19)

- 観客は、女性が81.0%、男性が19.0%と女性が多い。ジャンルによって若干男女比は異なり、「小劇場・現代演劇」や「古典芸能」では全体に比べて男性の割合が高い傾向がある。
- 平均年齢は42.9歳。年齢層に大きな偏りはなく、幅広い年齢層が来場している(図表2-1)。この傾向は、開館当初からの特徴である(平均年齢は、03年度：46歳、04年～07年度：42～43歳)。ジャンルによって年齢構成は異なり、「古典芸能」で年齢層が高い。
- 居住地は、北九州市周辺を含めた市域からの来場者が64.4%(うち北九州市内が52.9%)、その他の地域からが約3割(31.1%)である。福岡市域や、福岡県以外の九州各県、山口県からの来場者が07年度以降は約30%となっており、05年度以前と較べて増えている(図表2-2)。

図表2-1 年齢層(08年度)



図表2-2 居住地(08年度)



- チケットクラブには回答者の約2割弱(18.7%)が入会している。入会していない場合、今後入会意向があるのは18.4%である。

(2) 北九州芸術劇場での公演鑑賞の状況

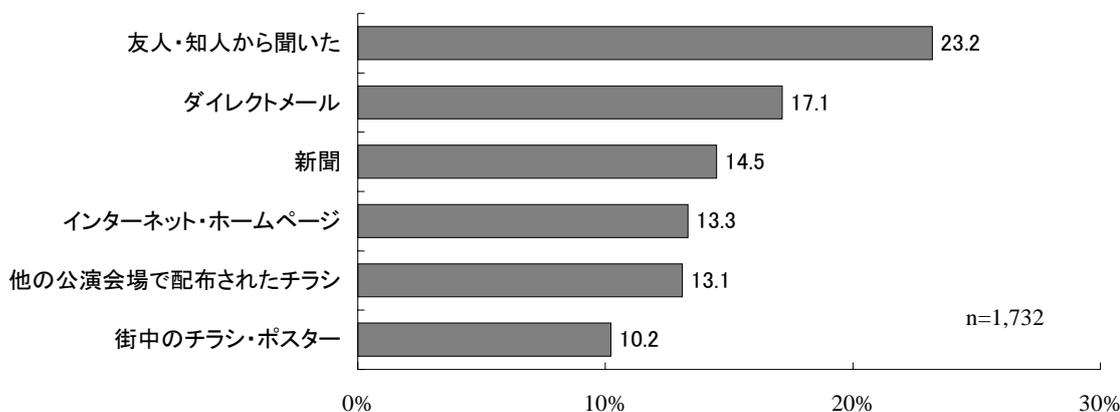
① 来場公演のジャンル (p.資-22~23)

- 回答者が来場した公演のジャンルは、「小劇場・現代演劇」が43.8%と最も割合が高い。
※アンケート配布公演26公演のうち16公演が「小劇場・現代演劇」であることによる。
- 来場公演のジャンルを年齢別にみると、18歳未満では他の年齢層に比べて「音楽劇」の割合が顕著に高い。18~40歳代は「小劇場・現代演劇」、50歳以上は「ミュージカル・商業演劇」の割合が高い。
- 劇場での鑑賞頻度が高いほど、「小劇場・現代演劇」を鑑賞している割合が高い。

② 公演情報の入手経路 (p.資-24~25)

- 公演情報の入手経路は、全体では「友人・知人から聞いた」(23.2%)の割合が最も高く、「ダイレクトメール」(17.1%)、「新聞」(14.5%)、「インターネット・ホームページ」(13.3%)と続く(図表2-3)。「ダイレクトメール」への回答が多いのは、回答者に「小劇場・現代演劇」の鑑賞者が多いことが影響していると思われる。
- 開館年度から継続して「友人・知人から聞いた」が最も回答が多く、口コミが重要な情報源であることがうかがえる。
- 年齢別にみると、29歳以下では「友人・知人から聞いた」、30歳代では「インターネット・ホームページ」、40歳代では「ダイレクトメール」、50歳代以上では「新聞」の割合が最も高い。
- 「インターネット・ホームページ」は、20歳代・30歳代で割合が顕著に高く、若い世代ではインターネット・ホームページが重要な情報入手経路となっている。一方「新聞」は年齢層が高いほど割合が高い(図表2-4)。

図表2-3 公演情報の入手経路(08年度) ※10%以上回答があった項目を、回答の多い順に掲載



図表2-4 年齢別 公演情報の入手経路(08年度)

n=1,732

	友人・知人から聞いた	ダイレクトメール	新聞	インターネット・ホームページ	他の公演会場で配布されたチラシ	街中のチラシ・ポスター
全体	23.2	17.1	14.5	13.3	13.1	10.2
18歳未満	45.2	6.5	4.8	3.2	3.2	24.2
18~29歳	32.7	10.5	4.7	19.8	12.1	12.8
30歳代	20.0	21.4	6.8	22.2	18.1	10.0
40歳代	20.5	21.1	11.1	13.3	12.3	7.2
50歳代	22.7	19.2	23.3	8.9	8.9	9.6
60歳以上	17.5	13.5	33.3	3.6	12.7	9.1

- 北九州芸術劇場での鑑賞経験別にみると、鑑賞経験が多いほど劇場やカンパニーからの情報（「ダイレクトメール」、「他の公演で配布されたチラシ」）を、鑑賞経験が少ないほど口コミやマスコミからの情報（「友人・知人から聞いた」、「新聞」）を情報源とする割合が高い。

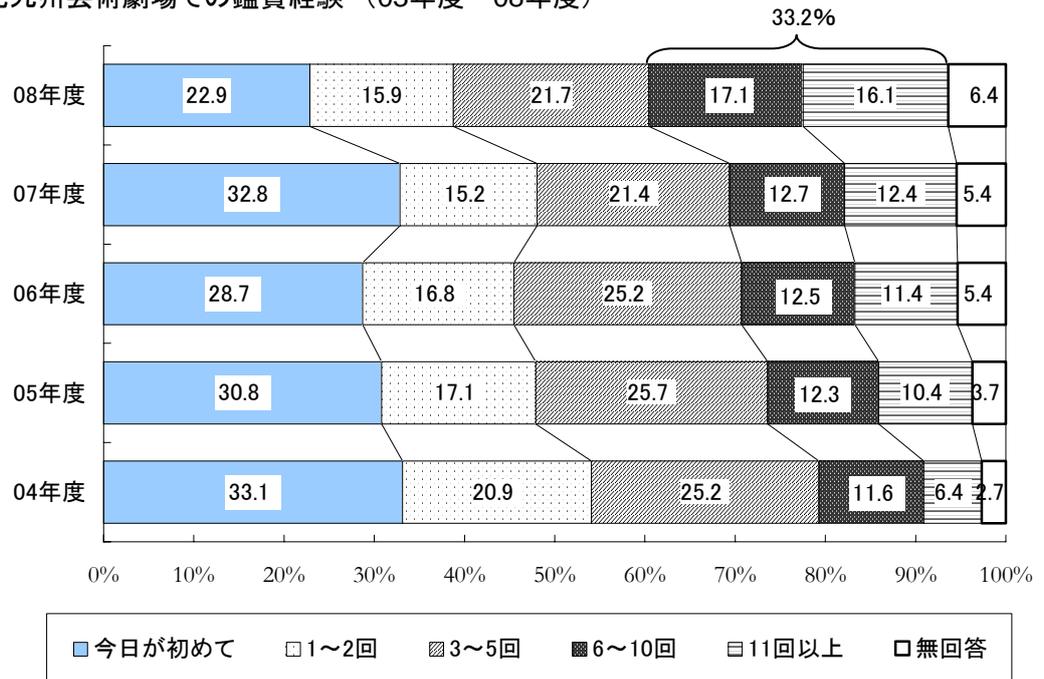
③公演に来た理由(p.資-26～27)

- 公演に来た理由は、「出演者等が好きだから」(52.9%)、「公演内容が面白そうだったから」(49.2%)への回答が多い。

④北九州芸術劇場での鑑賞経験(p.資-46～47)

- 北九州芸術劇場での鑑賞経験は、「今日が初めて」が22.9%と最も割合が高いが、「年3～5回」(21.7%)、「年6～10回」(17.1%)と大きな差はなく、「今日が初めて」からリピーターまで、幅広い観客を集客していることがうかがえる。
- 観客の北九州芸術劇場での鑑賞経験が多様であるのは04年度調査からの特徴であるが、年々来場頻度の高い観客(来場経験が6回以上)が増えている(図表2-5)。
- チケットクラブに加入している場合、劇場での鑑賞経験が「11回以上」が46.3%とほぼ半数を占める。
- 6回以上の鑑賞経験者の割合が高いのは、ジャンル別では「小劇場・現代演劇」、年齢別では「60歳以上」である。

図表2-5 北九州芸術劇場での鑑賞経験（03年度～08年度）



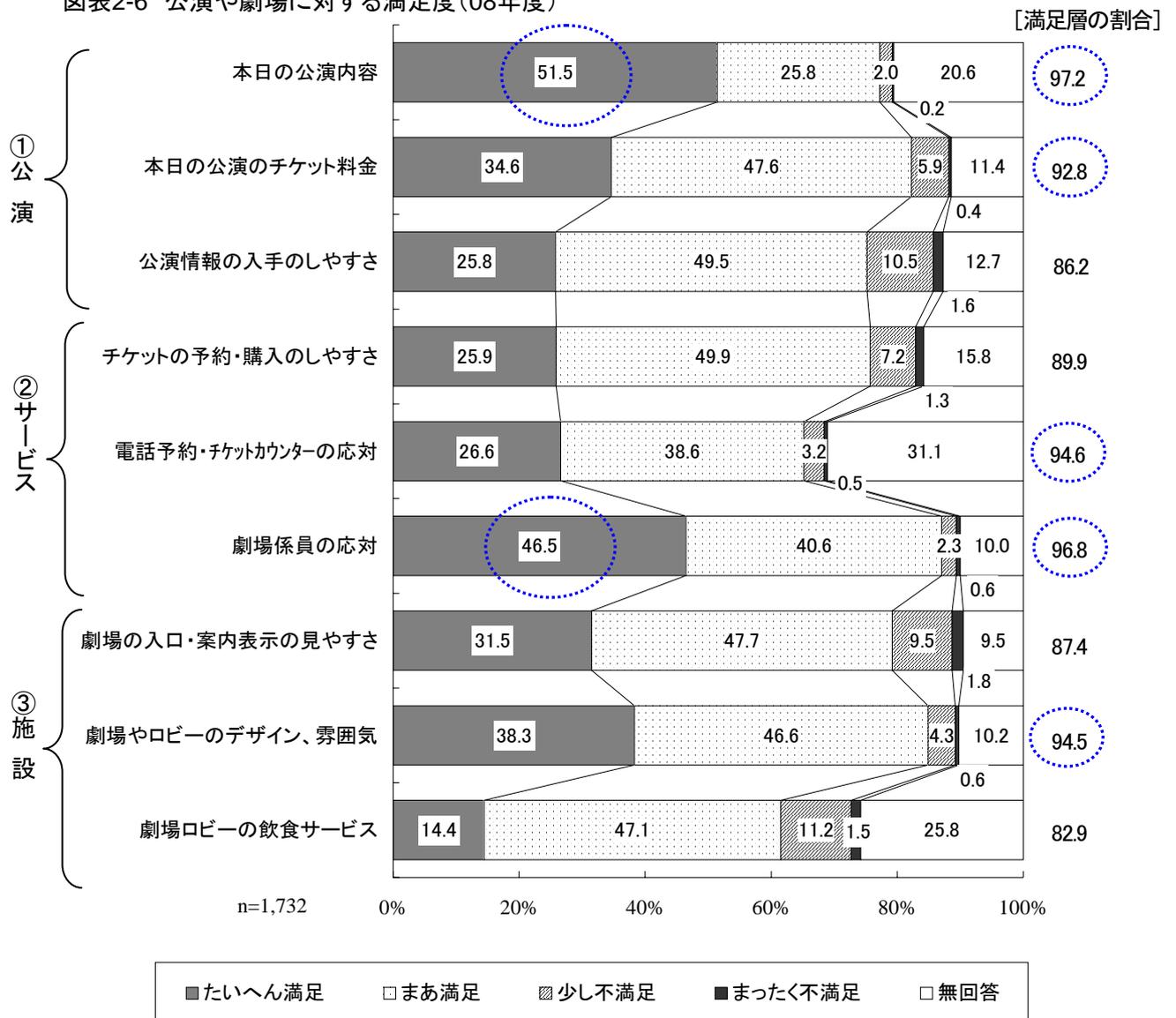
⑤公演前後の飲食やショッピング(p.資-28～29)

- 来場者の58.6%が公演前後に飲食あるいはショッピングをしており、平均金額は、飲食の場合が約1,600円(飲食をしている回答者の割合:全体の50.1%)、ショッピングの場合が約5,500円(ショッピングをしている回答者の割合:全体の26.3%)である。

(3) 公演や劇場に対する満足度 (p.資-30~38)

- 満足度に関する9項目のうち、「本日の公演内容」、「劇場係員の応対」の2項目については、「たいへん満足」の割合が、それぞれ、51.5%、46.5%と高い評価である。
- 満足層の割合（「たいへん満足」+「まあ満足」の割合。無回答を除く）が90%以上を占めるのは、「本日の公演内容」、「本日の公演のチケット料金」、「電話予約・チケットカウンターの応対」、「劇場係員の応対」、「劇場やロビーのデザイン、雰囲気」の5項目である（図表2-6）。
- 年齢別にみると、いずれの項目も年齢層が高くなるほど満足度は低くなる傾向がある。60歳代以上では、ほぼすべての項目で「たいへん満足」の割合が低く、特に情報入手や劇場のハード面でその傾向は顕著である。

図表2-6 公演や劇場に対する満足度(08年度)



※満足層の割合は、「たいへん満足」+「まあ満足」の割合。無回答を除く。

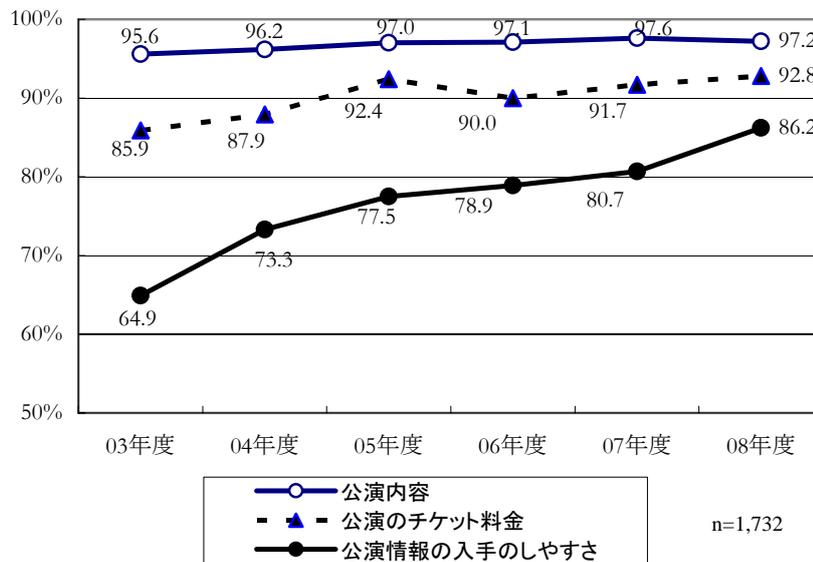
- 無回答が多い「電話予約・チケットカウンターの応対」、「劇場ロビーの飲食サービス」については、利用したことがない人が多いと考えられる。

- 次に、満足度に関する9項目を、①公演、②サービス、③施設の3つに分けて、満足層の割合の経年変化でみてみよう(図表2-7)。

①公演について

- 「公演内容」については、03年度から継続して満足層の割合の割合が顕著に高く、観客からの評価は極めて高い。
- 「公演のチケット料金」も05年度以降、90%以上の高い満足度を維持している。「公演内容」への満足度の高さが「公演のチケット料金」の満足度にも大きく関わっていると考えられる。
- 開館当初満足度が低かった「公演情報の入手のしやすさ」は、年々満足度が向上し、08年度は満足層の割合が86.2%となっている。

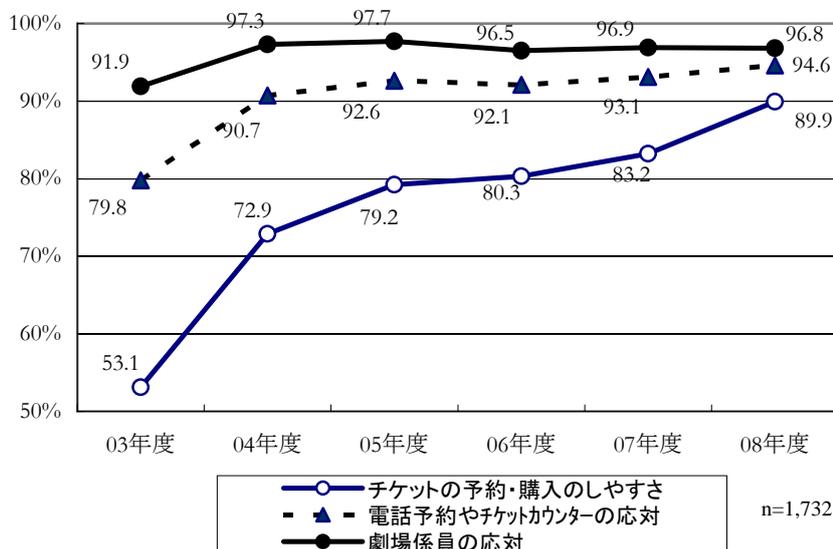
図表2-7 公演関連項目に関する満足層の割合(03年度～08年度)



②サービスについて

- 「劇場係員の対応」、「電話予約やチケットカウンターの対応」は、04年度に満足層の割合が90%を超え、そのまま高い満足度を維持している。
- 開館当初は満足層の割合が他の項目に比べて低かった「チケットの予約・購入のしやすさ」は、満足度の伸びが大きく、08年度は89.9%とほぼ90%にいたっている。

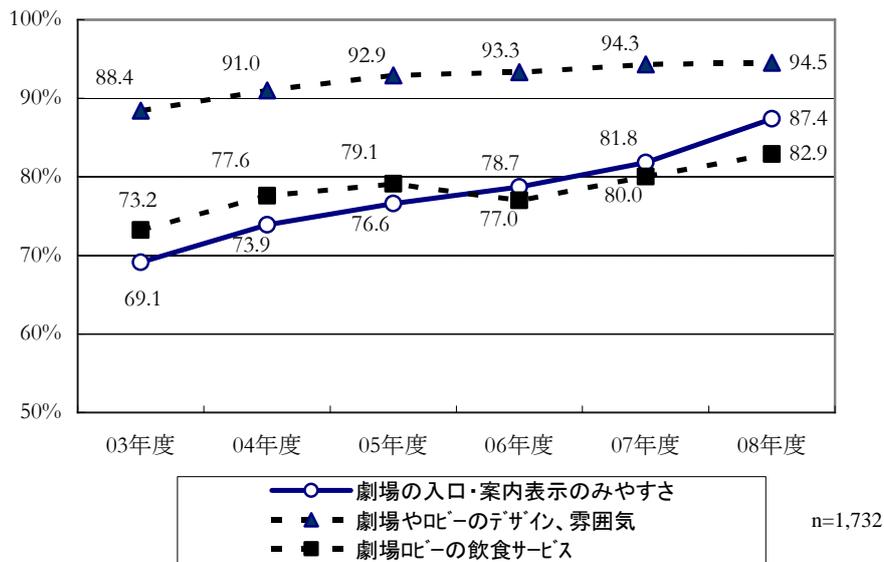
図表2-8 サービス関連項目に関する満足層の割合(03年度～08年度)



③施設について

- 施設に関わる3項目のうち、「劇場やロビーのデザイン、雰囲気」は、開館当初から満足層の割合が高く、そのまま高い水準を維持している。
- 一方、「劇場の入口・案内表示のみやすさ」は、複合施設である故の導線の複雑さもあり、開館当初は満足層の割合が他の項目に比べて低かったが、年々満足度が高まり、08年度は87.4%まで向上した。これは、観客が慣れてきたこともあるが、案内表示の増設や既存サイン文字の大型化、駐車場エレベーター入口での音声案内など劇場側の工夫や努力の成果が大きいといえよう。

図表2-9 施設関連項目に関する満足層の割合(03年度～08年度)

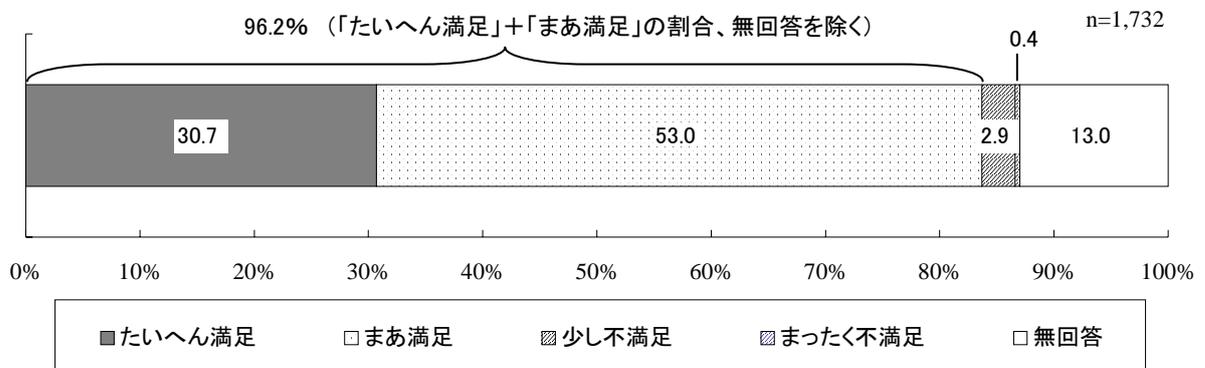


- ①公演、②サービス、③施設、いずれについても、すでに満足度が高い項目は高さを堅持し、満足度が低かった項目は年々向上していることが、満足度に見る特徴である。

④総合的な満足度について

- 劇場に関する総合的な満足度は、満足層の割合が96.2%。「たいへん満足」の割合が30.7%、「まあ満足」の割合が53.0%となっている(図表2-10)。

図表2-10 総合的な満足度(08年度)



(4) 劇場の運営方針について(p.資-39~41)

- 北九州芸術劇場の基本方針の「観る」、「創る」、「育つ」については、いずれも90%以上が賛同している(「ぜひやってほしい」+「まあやってほしい」の割合。無回答を除く)(図表2-11)。
- 「観る」については、「ぜひやってほしい」が80.5%と高い割合となっている。「創る」、「育つ」については、「観る」と比べると低いとはいえ、「ぜひやってほしい」が約48%と半数近くを占める(本アンケートが鑑賞者を対象としたアンケートであることには留意が必要である)。
- 「創る」、「育つ」ともに、29歳未満の若い世代で「ぜひやってほしい」と積極的に賛同する割合が高い。

図表2-11 運営方針への賛同度(08年度)

n=1,732

運営方針	ぜひやってほしい	まあやってほしい	あまりやる必要はない	まったくやる必要はない	無回答	賛同する人の割合	賛同しない人の割合
観る	80.5%	11.8%	0.5%	0.1%	7.0%	99.3%	0.7%
創る	47.9%	37.3%	4.4%	0.5%	9.8%	94.5%	5.5%
育つ	48.0%	35.9%	5.6%	0.8%	9.8%	92.9%	7.1%

※賛同する人の割合:「ぜひやってほしい」+「まあやってほしい」の割合。無回答を除く。

(5) 日頃の鑑賞活動について

①日頃コンサートや演劇に出かける頻度(p.資-44~45)

- 日頃コンサートや演劇に出かける頻度は、「年に3~4回」(23.0%)、「年に1~2回」(22.0%)、「年に5~9回」(16.7%)となっており、日頃の舞台芸術の鑑賞頻度は多様である。
- 北九州芸術劇場の鑑賞頻度が高いほど日頃の鑑賞頻度も高い一方、北九州芸術劇場での鑑賞は初めてでも、日頃月1回以上コンサートや演劇に出かける人(「月に1回程度」~「月に3回以上」の計)も約1割(12.4%)となっている。

②興味のあるジャンル(p.資-48~50)

- 全体では、「ミュージカル・宝塚歌劇」(57.0%)、「有名俳優の演劇」(53.9%)、「映画」(49.2%)、「小劇場・現代演劇」(43.9%)、「寄席・演芸・お笑い・独演会等」(37.4%)、「能・狂言・文楽・歌舞伎等」(31.6%)など、日頃興味のあるジャンルは多様である。
- 興味のあるジャンルは、性別や年齢で特徴がある。性別で見ると、男性は「映画」、「寄席・演芸・お笑い・独演会等」、女性は「ミュージカル・宝塚歌劇」、「有名俳優の演劇」への回答割合が高い。
- 年齢別で見ると、30歳代以下では「映画」、「小劇場・現代演劇」、50歳代・60歳代以上では「有名俳優の演劇」、「寄席・演芸・お笑い・独演会等」、「能・狂言・文楽・歌舞伎等」への回答割合が他の年齢層に比べて高い。

第3章 貸館利用者からみた評価

1. 利用者調査の実施要領

- 調査の対象: 2008年度の貸館利用者(団体)
- 配布・回収方法: 利用当日に配布、回収(後日ファックス、郵送での回収も受付)
- 集計・分析対象: 08年度に回収した126件
- ※07年度以前は、年度ごとの回収件数が少ないため、3ヶ年の結果を統合して集計、分析した。年度ごとの回収件数は、05年度:37件、06年度:20件、07年度:44件である。

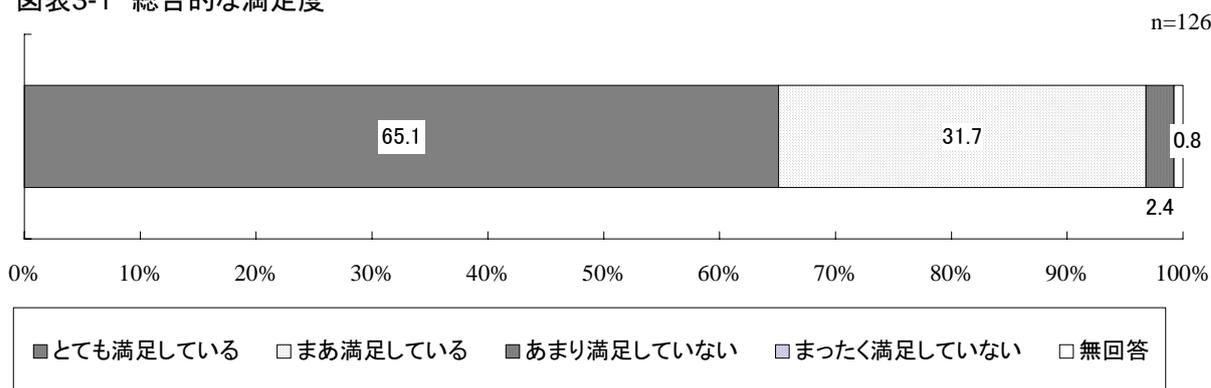
2. 利用者調査の結果概要

※本調査は、統計的な分析を目的とした調査ではなく、有効回答数も少ないため、アンケート結果の記述にあたっては、割合(%)とともに回答数を併記している。

(1) 劇場の使いごちに関する総合的な満足度(p.資-63)

- 劇場の使いごちに関する総合的な満足度は、「とても満足」が65.1%(82件)、「まあ満足」が31.7%(40件)で、満足層の割合(「とても満足」+「まあ満足」と回答した割合、無回答を除く)は97.6%と大変高い。

図表3-1 総合的な満足度



(2) 施設に関する意見(p.資-64~66)

- 施設に関する7項目については、「搬入・搬出がやりやすかった」以外の6項目で、肯定的な評価をしている割合(「はい」+「どちらかといえば『はい』」、無回答を除く)が90%以上と大変高い。
- また、「はい」という積極的に評価する割合も高く、特に「館内は清潔に保たれていた」、「ホワイエや客席などの雰囲気がよかった」、「舞台設備・機器は充実していた」の3項目は、「はい」が90%以上である。
- 「はい」という積極的な評価の割合について、アンケート実施初年度の05年度からの経年変化で見ると、ほとんどの項目で06年度に大きく向上し、07年度以降は維持、あるいは、さらに向上傾向にある。
- 「搬入・搬出がやりやすかった」については、肯定的な評価の割合が87.2%を占めるものの、他の項目に比べて「はい」への回答割合は低い。自由回答でも複合施設ゆえの駐車場からの動線のわかりずらさ、搬入・搬出の制限等に関する意見が記載されている。しかし、「は

い」への回答は、アンケート実施初年度の05年度の45.9% (17件)から、06年度は60.0% (12件)と向上し、07年度は65.9% (29件)、08年度は59.5%と60%前後で維持しており、利用者への搬入・搬出に関する説明や案内が周知されてきていることがうかがえる。

図表3-2 劇場に関する意見【施設(ハード)】

	「はい」	どちらか といえば 「はい」	どちらか といえば 「いいえ」	「いいえ」	無回答	「はい」+ どちらか といえば「はい」 (除無回答)
館内は清潔に保たれていた	96.8	3.2	0.0	0.0	0.0	100.0
ホワイヤ客席などの雰囲気よかった	92.9	6.3	0.8	0.0	0.0	99.2
広さ(客席等)はちょうどよかった	82.5	11.9	4.0	1.6	0.0	94.4
搬入・搬出がやりやすかった	59.5	27.0	11.1	1.6	0.8	87.2
舞台設備・機器は充実していた	90.5	8.7	0.8	0.0	0.0	99.2
楽屋など舞台裏の施設等が使いやすかった	81.0	13.5	4.8	0.8	0.0	94.4
設備・機器などを安全に使用できた	88.1	9.5	0.8	0.0	1.6	99.2

(3) 運営や対応に関する意見(p.資-67~70)

- 運営、対応に関する9項目についても、「開館時間は適当である」以外の8項目で、肯定的な評価をしている割合(「はい」+「どちらかといえば『はい』」、無回答を除く)が95%以上である。また、「はい」という積極的に評価する割合も高い。
- 「はい」という積極的な評価の割合について、アンケート実施初年度の05年度からの経年変化で見ると、ほとんどの項目で06年度に大きく向上し、07年度以降は維持、あるいは、さらに向上傾向にある。これは、劇場スタッフの努力の成果であるといえよう。
- 「開館時間は適当である」については、他の項目に比べると「はい」の割合が低い。自由回答でもより長い開館時間を求める意見や、仕込み等のために柔軟な利用時間の設定を求める意見が記載されている。

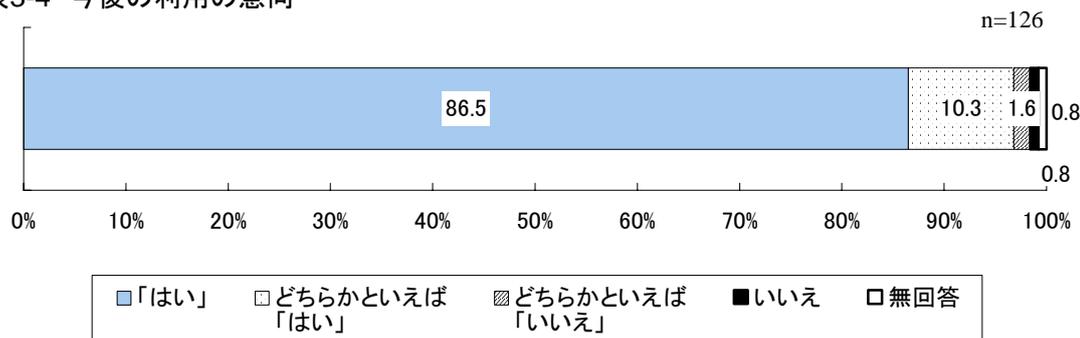
図表3-3 劇場に関する意見【運営や対応(ソフト)】

	「はい」	どちらか といえば 「はい」	どちらか といえば 「いいえ」	「いいえ」	無回答	「はい」+ どちらか といえば「はい」 (除無回答)
利用や予約情報が入手しやすかった	77.0	17.5	1.6	0.8	3.2	97.5
問合せや予約等が円滑だった	80.2	13.5	2.4	0.8	3.2	96.7
事務スタッフの対応がよかった	92.9	4.8	1.6	0.0	0.8	98.4
技術スタッフの対応がよかった	88.1	7.9	1.6	1.6	0.8	96.8
技術的な助言や援助が適切だった	87.3	7.9	1.6	1.6	1.6	96.8
苦情や要望への対応が適切だった	83.3	12.7	1.6	0.8	1.6	97.6
施設の利用に関する説明が適切だった	83.3	11.1	2.4	0.8	2.4	96.7
事故防止当に関する説明が適切だった	88.9	7.9	0.0	0.8	2.4	99.2
開館時間は適当である	57.1	19.0	16.7	4.8	2.4	78.0

(4) 今後の利用の意向 (p.資-70)

- 07年度から設定された「次回利用する機会があれば、利用したいか」という項目については、「はい」が86.5%(109件)と高い割合を占めており、「いいえ」への回答は1件であった。利用者の今後の利用意向は大変高い。
- 今後の利用意向への高さは、貸館事業全体への満足度の高さを示しているものであると考えられる。

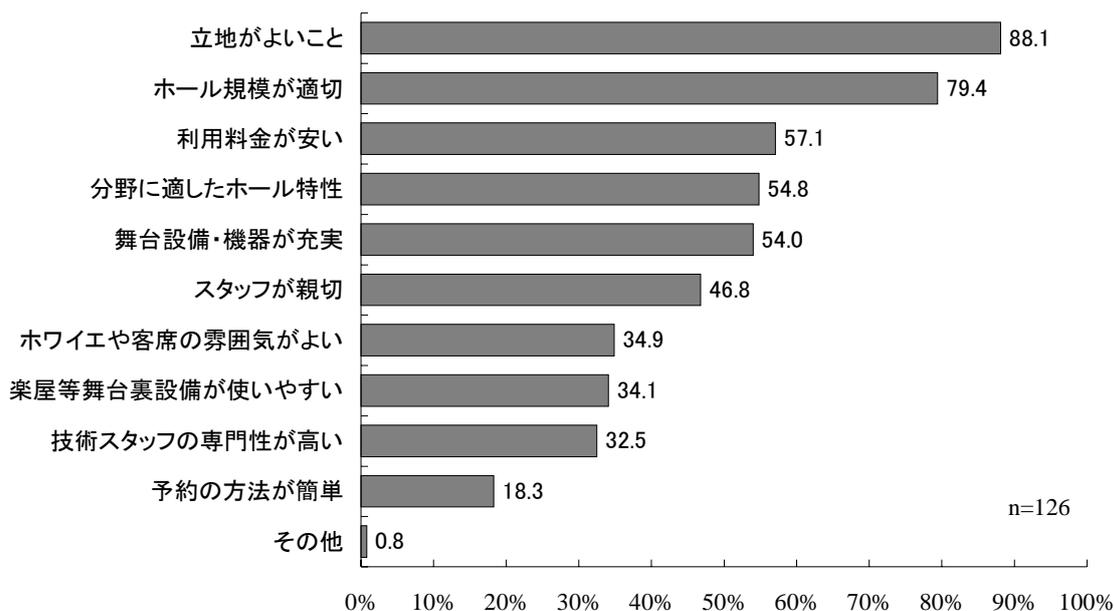
図表3-4 今後の利用の意向



(5) 利用の際、重視すること (p.資-71~73)

- 利用の際重視することとしては、「立地がよいこと」(88.1%・111件)、次いで「ホール規模が適切」(79.4%・100件)への回答が多い。
- そのほか、「分野に適したホール特性」、「舞台設備・機器が充実」も50%以上の回答となっており、ハードの要件を重視する傾向が高い。また、「スタッフが親切」(46.8%・59件)への回答も多い。

図表3-5 利用の際、重視すること



※ 割合の高い順に掲載(無回答を除く)

- 利用の際に最も重視することは、「立地がよいこと」(34.1%・43件)への回答が多く、次いで「ホール規模が適切」(27.0%・34件)、「分野に適したホール特性」(22.2%・28件)となっている。

第4章 経済波及効果とパブリシティ効果

劇場の運営は、様々な経済効果を生み出し、地域の活性化を促すと言われている。ここでは、昨年度調査と同様、経済波及効果について、産業連関表を用いた分析を行うとともに、パブリシティ効果について、その概要と金額換算による規模の把握を行った。

1. 経済波及効果

劇場の運営にともなう経済波及効果には、劇場および観客の支出からなる最終需要(直接的経済効果)、それに伴う生産増、そしてそれらがもたらす所得増、雇用増、税収増などが考えられる。

08年度も例年どおり、産業連関表に基づいた経済波及効果に加え、雇用効果を試算した。

(1) 北九州芸術劇場の経済波及効果の基本構造と分析方法

- 経済波及効果をもたらす支出(最終需要)は、
 - ①劇場の管理運営に関する支出
 - ②劇場の主催事業に関する支出
 - ③劇場の主催事業の観客の消費支出
 - ④貸館事業の主催者の事業支出
 - ⑤貸館事業の観客の消費支出の5つに分類することができる(図表4-1参照)。
- 今回の調査では、①、②については劇場の運営データに基づいて、③については観客アンケートの調査結果に基づいて把握・推計を行った。
- ④については貸館事業者からのデータ提供が必要であるが、調査対象となっていないため、貸館事業の1公演あたりの支出を、主催事業1公演あたりの支出の20%もしくは30%と想定して、この二つのケースについて、支出額を試算した。
- また、主催事業の観客アンケート調査の結果をみると、北九州市内だけではなく、九州全域や他の地域からも幅広く観客を集めているのに対し、貸館の事業内容をみると、同じように幅広いエリアからの集客や、同じような消費活動を行っているとは考えにくいため、⑤については、③のデータを援用して試算した。
- したがって、④、⑤の計算結果については、あくまでも参考値である。
- また、これらの計算結果のうち、北九州市内の経済波及効果と福岡県の雇用表の就業係数、雇用係数を用いて、北九州芸術劇場がどのぐらいの雇用効果を有しているかを試算した。

(2) 分野別の最終需要と経済波及効果、雇用効果

- 上記①から⑤の分野別に見た最終需要と、産業連関表を使った経済波及効果の計算結果は、図表4-1に示したとおりである。①劇場の管理運営、②劇場の主催事業、③主催事業の観客の消費支出にともなう最終需要の金額は、それぞれ7億900万円、3億2,200万円、1億8,000万円、合計で12億1,200万円となっている。そのうち、68.5%にあたる8億3,000万円が北九州市内での最終需要である。
- これら最終需要に伴う経済波及効果は、①が9億7,400万円、②が5億2,200万円、③が2億7,100万円、合計で17億6,700万円である。そのうち、62.9%にあたる11億1,100万円が北九州市内での経済波及効果である。生産誘発係数は、全体で1.46、北九州市内で1.34である。
- 参考値ではあるが、貸館の事業主催者の支出および貸館事業の観客の消費支出による経済波及効果(北九州市内のみ)は、7億9,900万円～9億1,400万円、生産誘発係数は1.34で

ある。

- それらをあわせた経済波及効果の総合計は、約25億6,600万円～26億8,100万円で生産誘発係数は1.41、北九州市内に限ってみると、約19億1,000万円～20億2,500万円で生産誘発係数は1.34となっている。
- また、これら経済波及効果の結果から試算した雇用効果は、就業者数(労働量)では143～153人、雇用者数(有給の役員・雇用者数、常勤・臨時含む)で123～131人で、商業、対個人サービス、対事業所サービスなどの分野を中心に雇用効果が現れている。

図表4-1 北九州芸術劇場の経済波及効果、雇用効果(08年度)

	最終需要	経済波及効果	誘発係数	
管理運営・主催事業	①管理運営 事務局経費、委託費、光熱水費、その他	7億900万円 (6億4,100万円)	9億7,400万円 (8億5,800万円)	1.37 (1.34)
	②主催事業 出演料、創作スタッフ費、音楽費、製作費(交通費、宿泊費、食費、制作雑費)、宣伝費、記録費、予備費	3億2,200万円 (8,300万円)	5億2,200万円 (1億1,200万円)	1.62 (1.35)
	③主催事業観客消費支出 飲食・買物費、交通費、宿泊費	1億8,000万円 (1億600万円)	2億7,100万円 (1億4,000万円)	1.50 (1.32)
	小計	12億1,200万円 (8億3,000万円)	17億6,700万円 (11億1,100万円)	1.46 (1.34)
貸館事業(参考値)	④貸館事業(貸館主催者の支出) 出演料、製作費、その他	1億7,300万円 ～2億6,000万円	2億3,000万円 ～3億4,500万円	1.33
	⑤貸館事業観客消費支出 飲食・買物費、交通費	4億2,500万円	5億6,900万円	1.34
	小計(参考値)	5億9,800万円 ～6億8,400万円	7億9,900万円 ～9億1,400万円	1.34
合計(参考値)	18億1,000万円 ～18億9,600万円 (14億2,800万円 ～15億1,400万円)	25億6,600万円 ～26億8,100万円 (19億1,000万円 ～20億2,500万円)	1.41 (1.34)	
	雇用効果 (北九州市内)	143～153人(就業者ベース) 123～131人(雇用者ベース)		

注) 下段の括弧内の数字は、北九州市内の最終需要、経済波及効果。貸館事業については、最終需要、経済波及効果とも北九州市内のみと想定した試算結果である。また、各データは四捨五入した数字のため、小計、合計の数値が各データの合計と合わない箇所がある。

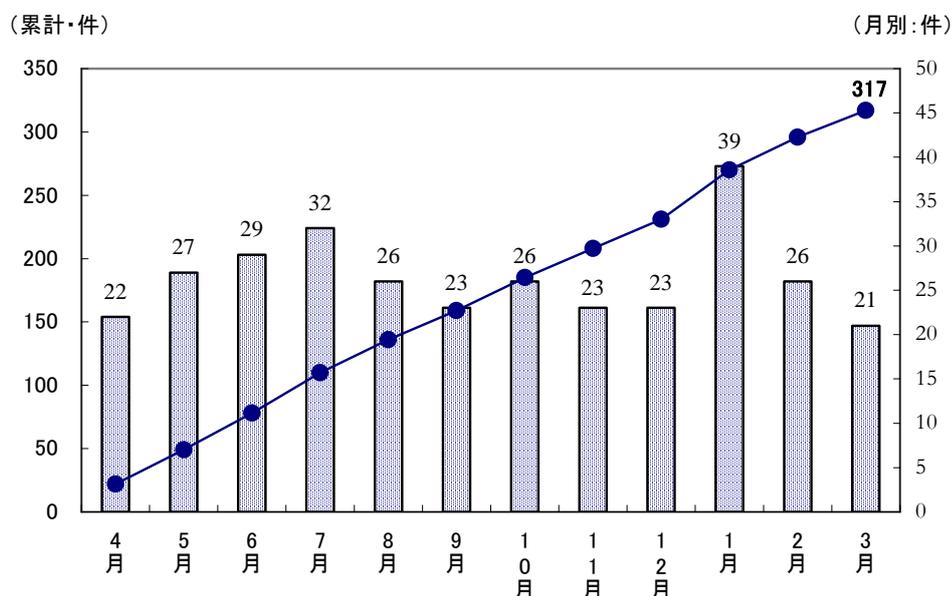
2. パブリシティ効果

文化的な催しや劇場運営においては、新聞や雑誌への記事掲載やテレビ報道などによって、地域の認知度向上やイメージアップが図られるケースが多く、それらは「パブリシティ効果」と呼ばれている。そして、その効果は、記事の大きさなどを基準にした広告宣伝費を目安にして、しばしば金額換算される。本事業評価調査では、03年度から新聞記事に焦点を当てたパブリシティ効果を算出しており、08年度も継続してパブリシティ効果の算出を行なった。

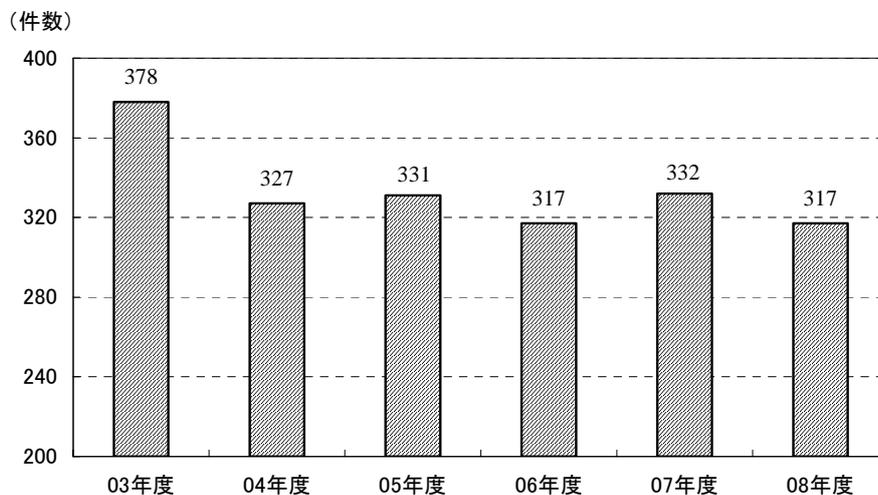
(1) 「北九州芸術劇場」をキーワードとした08年度の掲載記事の件数と内容

- 08年度についてみると、「北九州芸術劇場」をキーワードに検索された新聞記事の件数は317件(図表4-2)である。
- 03年度は開館年度ということで話題性が高く、掲載記事の件数も多かった。04年度以降は、「北九州芸術劇場」を会場とするイベントや関連記事、北九州芸術劇場の事業に関する記事が毎月コンスタントに掲載されている(図表4-3)。

図表4-2 月ごとの掲載件数と累計(08年度)



図表4-3 年度ごとの新聞記事掲載件数の推移(03年度～08年度)



資料) 図表4-2、4.3ともに「日経テレコン」記事検索の結果より作成

- 新聞別に見ると、08年度で掲載が最も多いのは西日本新聞(119件)、次いで、朝日新聞(62件)、日経新聞(41件)、読売新聞(36件)、毎日新聞(33件)、その他(九州各県をはじめとする地方新聞、26件)となっている(図表4-4)。

図表4-4 新聞別件数一覧(03年度～08年度)

	03年度	04年度	05年度	06年度	07年度	08年度
西日本新聞	151	147	149	149	120	119
読売新聞	40	61	46	31	28	36
朝日新聞	78	52	48	60	74	62
日本経済新聞	34	32	37	37	50	41
毎日新聞	58	31	34	20	32	33
その他	17	4	17	20	28	26
計	378	327	331	317	332	317

資料)「日経テレコン」記事検索の結果に基づく

- これら記事を、
 - ① 北九州芸術劇場の公演紹介・取材記事、劇評など
 - ② 北九州芸術劇場のPRキャンペーン、劇場主催イベントの紹介記事
 - ③ 情報コーナーなどでの公演情報の提供等
 - ④ 芸術文化以外のイベント、講演の紹介記事(会場名が「北九州芸術劇場」)
 - ⑤ 情報コーナーなどでの芸術文化以外のイベントの情報提供(会場名が「北九州芸術劇場」)
 の5種類に分類し、北九州芸術劇場として記事性の高い①と②を抽出したところ、149件であった(07年度:154件)。
 - ※③のうち公演内容の紹介が掲載されているものも抽出
- その内容を、「自主事業／提携・協力事業」、「学芸事業」、「貸館事業」、「その他(劇場全般、劇場職員への取材記事等)」に分類すると、それぞれ、55件、12件、50件、32件であった(図表4-5)。
- 「自主事業／提携・協力事業」については、公演内容や情報紹介のほか、「風街」といった北九州芸術劇場のプロデュース公演、「ガラスの仮面」、山海塾公演など話題性の高い作品に関する記事が掲載されている。
- 「学芸事業」については、ワークショップ、リーディング事業などの事業が幅広く取り上げられている。
- 「その他」では、北九州演劇フェスティバル、北九州芸術劇場の総務大臣賞受賞(JAFRA AWARD)等に関する記事が掲載されている。

(2) 広告掲載料をベースとした金額換算と評価

- これら149件の掲載記事について広告掲載料をベースに金額換算すると、約1億2,600万円という結果となっている(図表4-5)。
- 03年度は開館、04年度は「とびうめ国文祭」で話題性が高かったことから、「その他事業」に分類した記事の件数・文字量が多く、試算金額も高くなっている。
- 05年度は「ルル」や「IRON」といった全国展開型の創造事業の公演数が多かったこと、06年度は「錦鯉」や「地獄八景」など全国展開型の創造事業の公演数が多かったことに加え

て、「時の中の時—とき」が朝日舞台芸術賞グランプリを獲得し、全国紙に掲載された記事が多かった。金額換算時の広告料は全国紙で高いため、05年度と06年度は全体の掲載件数は飛びぬけて多くはないが、試算金額が高いという結果になっている。

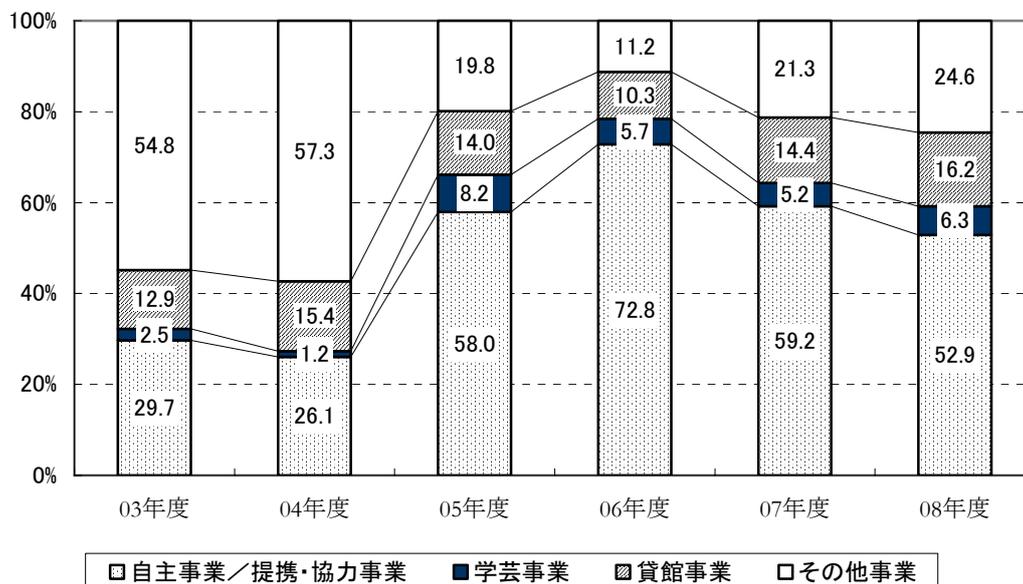
- 07年度以降は、試算金額は低くなっているものの、北九州市域の新聞を中心に劇場の自主事業／提携・協力事業に関する情報が毎月コンスタントに掲載されており、掲載件数は05年度、06年度とほぼ同じ数字となっている。また、掲載記事における自主事業割合は、05年度以降50%以上を維持しており(図表4-6)、北九州市域での自主事業を中心とした劇場事業の定着が新聞記事からうかがえる。
- 08年度の劇場事業に対する北九州市の補助金は約1億3,700万円であり、劇場事業は補助金に近いパブリシティ効果(約1億2,600万円)を生み出しているということができよう。

図表4-5 新聞掲載記事の内容と金額換算(03年度～08年度)

	2003年度		2004年度		2005年度		2006年度		2007年度		2008年度	
	掲載 件数	金額換算 (千円)										
自主事業／提携・協力事業	70	62,140	54	46,211	75	110,044	88	160,243	85	66,027	55	66,588
学芸事業	8	5,331	5	2,141	25	15,505	17	12,451	12	5,777	12	7,926
貸館事業	46	27,072	43	27,235	34	26,622	35	22,741	31	16,056	50	20,392
その他事業	56	114,683	61	101,577	25	37,678	23	24,680	26	23,737	32	30,961
計	180	209,226	163	177,164	159	189,849	163	220,115	154	111,597	149	125,867

注) 金額換算は、写真を含めた記事面積と各新聞社の広告掲載料に基づいて、計算・集計した。

図表4-6 事業ごとの掲載割合 [金額換算値ベース](03年度～08年度)



第5章 劇場運営・事業実施における現場からの意見 ー劇場スタッフへのグループインタビューの結果から

本章では、事業評価や今後の運営の改善等につなげるため、劇場スタッフへのグループインタビュー調査を実施し、そこから得られた事業や運営の課題と今後に向けた提案の概要を整理した。

1. グループインタビューの実施要領

グループインタビューは、次の要領で実施した。

①グループ・参加者：

- グループ：業務別に設定した①事業係、②制作係、③学芸係、④舞台技術課、⑤広報係、⑥営業係・総務係票券担当、⑦施設係利用担当（貸館）の7グループ
- 参加者：各グループ3～5名の担当スタッフ

②インタビュー内容：

- 劇場のミッションに対する認識・意見
- 劇場運営の中での担当業務の位置付け、役割
- 業務に関する課題、その改善策や新しい提案
- 今後の劇場の方向性、劇場運営、事業評価に関する意見

なお、グループインタビュー参加者には、財団法人地域創造の「公立ホール・公立劇場の評価指針」の政策評価シートの記事を事前に依頼し、グループインタビュー時の参考資料とした。ここでは、政策評価シートへの記入内容も参照しながら、グループインタビューの概要をとりまとめた。

2. グループインタビューで得られた意見の概要

(1)劇場のミッションに対する認識・意見

- 「創る」「育つ」「観る」という劇場のミッション（運営方針）の存在や内容は、概ねスタッフに浸透している。
- 一方で、「（ミッションを）普段意識していなかった」、「ミッションがあり、そこに向かっているのはわかるが、担当業務の中でそこまで行き着いていない」という感想を述べたスタッフも少なくない。
- また、「劇場が何を目指しているのか知りたい（＝現状ではわからない）」、「個人個人が（ミッションを）目標としてどこまでやっつけていけるかわからない」という意見も出ている。

(2)劇場運営の中での担当業務の位置づけ、役割

- 日常業務の実施にあたっては、いずれのスタッフも日々工夫と努力をしており、業務に対する熱意と前向きな姿勢がうかがえる。
- 日々の多忙な業務の中、劇場のミッションや担当業務の位置づけ、役割について考えるための時間的・精神的余裕を持つことが難しいという意見もあがっている。
- 開館当初から経験を積んできたスタッフからは、業務の中でやりがいや手ごたえを感じている一方、今後の自分自身の成長やキャリアアップに関して明確なビジョンを持ちにくいという意見も寄せられた。そんな中でも、経験の長いスタッフには、新しいスタッフを育てようという意識やそのための具体的な方策を考えている様子がうかがえる。

(3)業務に関する課題、その改善策や新しい提案

グループインタビューを実施した7グループそれぞれが指摘した課題は多様であるが、その中で示された劇場の運営や事業に対する課題には、複数のグループが共通して指摘するものもあった。

中でも共通意見が多かった、①地元演劇人や劇団、舞台事業関係者の育成、②他の機関や地域との連携、③劇場を応援する市民、観客の開拓、④データ等の整理、活用、振り返り、⑤自己研鑽や研修の機会、⑥組織内での情報共有、コミュニケーションの6つについて、以下に課題やスタッフからの提案等を整理した。

①地元演劇人や劇団、舞台関係者の育成

- 地元劇団の支援、北九州を拠点として活躍する演出家や舞台美術家などの発掘や育成、将来の担い手づくりについては、業務として直接携わっている事業係、制作係、学芸係だけではなく、その他の係でも強い問題意識を持っており、地元劇団や表現活動を行う市民がステップアップするための小劇場の使い方に関する提案など、さまざまな意見があがっている。
- こうした地元演劇人(劇団)や演劇関係者の育成・支援は、係を越えての検討が必要だという意見もあった。

②他の機関や地域との連携

- 日頃のアウトリーチ活動で地域に出ていく学芸係では、学校・教育委員会や市民センターとの連携が中心的な課題である。
- 今後、地域との連携を進めるにあたり、教育や福祉などの他分野に、劇場事業や演劇がどう寄与するのかを説明するための理論と言葉を持つ必要があるという問題意識が強い。
- 地域との連携について、自分たちから地域に出向いていくことが必要だというのは、担当業務を問わず共通した意見である。「こちらから街に出ていくような取り組みが必要」、「用があるから話をしに行くのではなく、自分から地域に近づいていくことが必要」といった意見があがっている。

③劇場を応援する市民、観客の開拓

- 劇場が街や市民に定着するためにも、劇場を応援する市民や観客の開拓が必要であるということも、共通した課題意識である。
- この点について、スタッフからは、劇場への入口としてのワークショップ・講座の重視、貸館事業に来場する観客の呼び込み、劇場に人を招き入れるための商業店舗との連携やライフイベントなどに関連づけた演目づくりなど、前向きな意見や提案があがっている。

④データ等の整理、活用、振り返り

- データの整理や活用については、「日々の多忙な業務の中、蓄積するに留まっている」、「担当を越えた意見交換の機会があれば」、「係としてデータを持っているので、もっと活用していく必要がある」、「事業評価調査の結果も、充分活用できていない」という意見が多い。
- 特に学芸系からは、「劇場の事業や演劇の効果を学校や地域に説明するための理論と、事業の効果に関するデータなど見てわかるものを準備することが必要」、「データの収集や整理、関係者からの意見のとりまとめをどのようにするのか、収集・整理の具体的な手法を知りたい」という声も聞かれた。

⑤自己研鑽や研修の機会

- データ等の整理や活用とともに各係から要望が多かったのが、自己研鑽や研修の機会の充実である。
- 特に現場で経験を積んできたスタッフからは、「経験を外に発信する言葉を持つための勉強をしたい」、「事業の効果を説明する言葉を体得したい」、「他の劇場や公立施設ではどうしているのかを知りたい」など、今後のステップアップや劇場の外との連携のために、自己研鑽やスキルアップの機会を望む声が多い。
- 新しい舞台芸術の動きや流れを知るためにも、もっと演劇や舞台芸術などを観て勉強したいという声も聞かれた。
- また、「1年間を振り返ったり、劇場としての方向性を話し合う場がない」、「指定管理者制度のことなど劇場の立ち位置を職員全員で知ることが必要」、「(指定管理者制度や利用料金制度、劇場法など)劇場を取り巻く環境などについての意識を持たなければ」という意見もあがっている。

⑥組織内での情報共有、コミュニケーション

- 係内では、コミュニケーションが十分に行える環境にあり、日頃の担当業務については円滑に実施されていることがうかがえる。
- また、ここ1～2年でチーフクラスの集まるミーティングが開催されるようになり、係間でのスケジュールの調整等の情報連携が改善されつつあることは、いずれのグループでも前向きに捉えられている。
- 一方で、係を超えての情報や課題の共有、事業の実施前の話し合いや調整については、まだ課題を残しており、「係ごとに担当範囲が決まっているので、なかなか意見を伝えることができずにいる」、「一つ一つの事業では無理でも、子どものためのシリーズや秋の公演といったテーマごとに話し合いを行うことで、業務がスムーズになるのでは」といった意見や提案があがっている。

(4)今後の劇場の方向性、劇場運営、事業評価に関する意見

- 今後の劇場のあり方や将来像については、「誰もが気軽に訪れる賑わいの拠点になってほしい」、「市民の憩いの場として、人に会うために劇場に行く、そういった場になってほしい」、「北九州の拠点施設として街と一緒に賑わいを創出する場になってほしい」、「(市民が)劇場があることが誇りになるようになってほしい」といった意見があがっている。表現する言葉は違うが、劇場が街や市民に浸透し、賑わいの拠点となることは、スタッフの共通の願いとなっているようである。
- また、「劇場や演劇が特別な経験を与えることができるような場であってほしい」、「北九州市だけではなく、九州全体の劇場になるよう、九州全体を視野に入れた人材発掘・支援が必要」といった意見も寄せられた。

第6章 評価フレームに基づいた事業評価結果

最後に、03年度から08年度までの6ケ年の北九州芸術劇場の事業評価結果をとりまとめた。07年度までは、初年度(2003年度)の調査研究で設定した事業評価の基本フレームで整理していたが、本年度は、(財)地域創造の「公立ホール・公立劇場の評価指針」(2007年3月)の評価フレームに基づいた再整理を行った。

1. 評価フレームの考え方

「公立ホール・公立劇場の評価指針」の評価フレームは、「A.設置目的」、「B.運営・管理」、「C.経営」という3つの戦略・評価軸を設定し、それぞれに評価大項目(戦略目標)を設定、さらに評価中項目(戦略)とそれを評価するための評価指標・基準を設定している。

図表6-1は、A、B、C、3つの戦略・評価軸の評価大項目を整理したものである。

図表6-1 「公立ホール・公立劇場の評価指針」の評価フレーム(評価軸と評価大項目)

戦略・評価軸	No	評価大項目
A 劇場の設置目的	A-0	劇場のミッション
	A-1	鑑賞系事業
	A-2	創造系事業
	A-3	普及系事業①:主に劇場内で実施するワークショップや講座など
	A-4	普及系事業②:アウトリーチ(学校、福祉施設等との連携など)
	A-5	市民文化活動支援(市民参加型事業、アマチュア支援など)
	A-6	地域への貢献①(地域経済への波及効果など)
	A-7	地域への貢献②(地域アピール、ブランド力のアップなど)
	A-8	広域施設としての役割発揮
B 運営・管理	B-1	場の提供・支援(貸館)
	B-2	施設のホスピタリティ・サービス
	B-3	施設の維持管理
C 経営	C-1	経営体制
	C-2	リサーチ&マーケティング
	C-3	経営努力

08年度は、上記図表6-1の基本フレームに基づいて、03年度から08年度の6ケ年で把握したデータや情報をあらためて整理した。整理にあたっては、次の3点を大きな方向性とした。

- 事業評価の結果を、定量評価(事業実績データ、アンケート調査データ)とともに、定性評価(グループインタビュー)の結果も含めて、総合的に整理する。
- 「公立ホール・公立劇場の評価指針」の評価指標・基準を網羅することを目的とはせず、基本フレームを活用することにより、北九州芸術劇場の事業実績や運営の状況を体系的に

把握することを目的とする。

- そのため、「公立ホール・劇場の評価指針」の評価指標・基準とはすべてが一致するものではない。また、段階評価(達成度合いを自己点検できる解説式のモデル指標)項目については、劇場・ホール内部の自己評価であることから、本報告書では掲載対象外とし、劇場スタッフへのグループインタビューで得られた意見を、一部掲載している。

2. 評価結果の概要

基本フレームの評価項目ごとの評価結果は、図表6-3に一覧表として整理し、そのポイントを以下に記述した。 ※割合(%)の記載は、小数点以下を四捨五入して掲載している(図表6-3も同様)。

A. 劇場の設置目的

A-0 ミッション –「創る」「育つ」「観る」

①劇場の運営方針(ミッション)の有無と内容、ミッションの浸透の状況等

- 劇場では開館年度から、「創る」「育つ」「観る」の3つの運営方針を設定している。
- 08年度も、3つの運営方針に基づき、北九州からの発信と地元演劇人の発掘と育成を意識した創造事業、舞台関係者の育成や子どもや学校などを対象とした積極的な学芸事業、小劇場・現代演劇に多様なラインナップを揃えた公演事業を展開し、「創る」「育つ」「観る」それぞれの事業が一体となった事業構成となっている。
- 08年度に実施した劇場スタッフへのグループインタビューからは、劇場のミッションは劇場内で周知されていることがうかがえる。一方、日々の多忙な業務の中で、一人一人が常にミッションを意識して業務を進めることが今後の検討課題となっている。

②劇場の運営方針を支持する市民の割合(市民の支持率)

- 観客の運営方針への支持率(※)は、「創る」「育つ」「観る」いずれについても、開館の03年度から継続して90%を超えている。
※「ぜひやってほしい」+「まあやってほしい」の割合。無回答を除く。
- 05年度に実施した市民意識調査(※)の結果でも、一般市民からの運営方針への支持率は高い(「創る」「育つ」「観る」いずれも支持率は80%以上)。特に「観る」、「育つ」については、市民から「ぜひやってほしい」との積極的な支持が50%以上となっている。
※北九州市内に居住する男女3,000名に郵送でアンケートを送付・回収。有効回答数は863件、回収率は29%。
- これら3つの運営方針は、今後も堅持するとともに、広く来場者や市民に発信することが望まれる。

③事業や運営に対する自己評価や振り返り、運営データの蓄積

- 08年度に実施した劇場スタッフへのグループインタビューからは、業務の振り返りが必要であることへの意識は高く、また、振り返りを実施していこうとする流れができつつある。また、各係で蓄積されているデータを活用し、評価や業務にフィードバックしていくことが必要だという認識も高い。
- 蓄積しているデータや事業評価データに関する係内での検証や活用に向ける話し合いの場、係を超えた意見交換の場の設定を検討する必要があると考えられる。

④市民の劇場の認知度や劇場への意見

- 05年度に実施した市民意識調査の結果では、北九州芸術劇場の認知度(劇場があること

を「知っている」と回答した割合)は84%と高い。知っている場合の来場・利用率は44%。来場したことがない場合、今後の来場意向は69%となっている。

- 今後は、広い北九州市の中で劇場の認知度をどのようにあげていくか、さらに、劇場への来場経験を持ち、劇場の存在や事業を応援してくれる市民をどのように増やしていくかが検討課題である。これは、劇場スタッフへのグループでも、担当業務に関わらず問題意識が高い。

⑤劇場の来場者(利用者)数

- 北九州芸術劇場への年間来場者(利用者)数は、05年度以降、毎年27~28万人で推移している。08年度は27万9,000人、この6年間で延べ165万人を超えた。07年7月1日現在の北九州市の人口(推計値)は約98万7,000人であり、すでに人口を超える来場者を迎えたことになる。
- 今後、北九州劇場を地域になくてはならない施設として位置付けていくためには、5年後、10年後を見据えた長期的な事業の継続が必要であろう。

A-1 鑑賞系事業 [観る]

観る楽しみを知ってもらうため、国内外のエンターテインメント性や芸術性の高い作品を招き、市民に様々な公演を提供する。

①ミッションに基づいた鑑賞系事業の実施

- 08年度も、「観る」(鑑賞系事業)では、中劇場を中心とした小劇場・現代演劇、話題性の高いダンス・現代舞踊のほか、ミュージカル・商業演劇など幅広いラインナップの公演が行われ、多様な年齢層、多様な鑑賞経験を持つ観客が来場している。

②年間延べ観客数

- 08年度は、公演事業については、15事業で33回の公演が行われた。入場者数は18,164人、入場率は85%である。
- 創造事業、提携・協力事業、演劇フェスティバルも含めた鑑賞系事業全体では、34事業、公演回数は114回。入場者数は36,068人、入場率は83%となっている。

③公演に対する観客の満足度

- 観客調査の結果から公演(主催/提携・協力事業)に対する観客の満足度をみると、開館年度(03年度)から継続して「(本日の)公演内容」への満足度の高さが顕著で、08年度も満足層の割合(※):97%、「たいへん満足」の割合:52%と、観客からの高い評価を得ている。
※「たいへん満足」+「まあ満足」の割合。無回答を除く。
- あわせて、「(本日の)公演のチケット料金」も満足層の割合は90%以上であり、「公演内容」への評価の高さが「公演のチケット料金」の満足度にも反映していると考えられる。

④鑑賞系事業による芸術団体やアーティストからの評価

- 06年度に実施した公演事業での劇場使用者のグループインタビューでは、劇場の運営方針や事業への支援の声が高く、また期待も大きいことが明らかとなった。
- 特に、劇団・カンパニー側の立場に立ち、作品づくりに積極的に関わる劇場スタッフの対応は、人間関係・信頼関係が作れる劇場であると評価が高い。これは、「創る」「育つ」「観る」という劇場コンセプトが劇場スタッフに浸透し、実践されていることのあらわれといえる。

A-2 創造系事業 [創る]

北九州芸術劇場のオリジナル・プロデュースの演劇作品を創ることにより、“ものづくりの街”北九州市をアピールし地域の活性化を促していく。

①ミッションに基づいた創造系事業の実施

- 08年度も、全国発信型、地元演劇人の育成型、市民参加型などの多様な事業が実施された。
- 「A MIDNIGHT SUMMER DREAM」、「風街」のプロデュース作品は、東京と大阪で計14回の公演を行い、7,220人が来場した。
- 「北九州パントマイムフェスティバル」、合唱物語「わたしの青い鳥」といった市民参加型の創造事業は、03年度あるいは04年度から継続的に実施されているプログラムであり、入場率もそれぞれ89%、93%と、市民への定着度と支持の高さがうかがえる。
- 「シアターラボ」、「シアターコラボ」、「リーディングセッション」など地元演劇人の育成型事業では、入場率も高く(96%/100%/89%)、地域からの注目度が高いといえよう。
- 開館当初から継続して実施されている事業に新規企画事業を加えながら、創造系事業を効果的に実施していこうとする方向性がうかがえる。

②年間延べ観客数

- 08年度、「創る」では、8事業で41回の公演が行われ、入場者は12,320人であった。入場率は平均で82%と高い入場率となっている。

③創造系事業の公演に対する観客の満足度

- 観客アンケートに創造系事業の公演も含む。鑑賞系事業③(p.33)を参照されたい。

④創造系事業による芸術団体やアーティストへの効果

- 06年度に実施した公演事業での劇場使用者のグループインタビューでは、北九州・福岡の若手劇団・カンパニーから、「劇団相互、あるいは北九州・福岡の連携が強まった」、「プロデュース事業等に関わることで役者や劇団のレベルアップになった」という意見があがっている。

A-3-4 普及系事業 [育つ] ※A-3が講座・ワークショップ、A-4がアウトリーチ

[育つ]:アーティストを小・中学校等に派遣するアウトリーチ活動や劇場サポーター組織を通じてのヒューマンネットワーク作り等により、舞台芸術の手法を用いた人材育成・教育普及事業を行い、地域を育てながら地域とともに育っていく劇場を目指す。

①ミッションに基づいた普及系事業の実施

- 「育つ」については、開館以前から「シアタープロジェクト」として小学校を中心としたアウトリーチに取り組み、劇場内には学芸係を設置し、継続的な事業を実施している。
- 08年度は、
 - ワークショップや講座事業型の事業として、「バックステージツアー」、「チャレンジ！ えんげき」、「劇場塾」、「高校生のための演劇塾」など
 - アウトリーチ事業として、小学校での「表現教育推進事業」や「学校出前演劇ワークショップ」、中学生と指導者を対象とした「演劇ネットワーク事業」など学校を対象とした事業と、ダンスや演劇のワークショップなど
 - 創造参加として、「シアターラボ」、「シアターコラボ」、合唱物語「わたしの青い鳥」、「北九州パントマイムフェスティバル」

といった、市民が舞台芸術に触れる機会や創造参加への機会の提供に取り組んでいる。

- アウトリーチ型の事業が増えており、地域や他分野との連携を進めていく方向性がうかがえる。

②年間の事業数、アクティビティの回数、参加人数

- 08年度は、18事業、279回のアクティビティが実施された。参加延人数・入場者数の合計は10,577人、受講(入場)者数でカウントすると4,382人である。

③講座・ワークショップ参加者の満足度

- 04年度に実施した、講座・ワークショップ参加者を対象にしたアンケート調査の結果では、満足層は98%、さらに、「たいへん満足」が56%と、事業に対する参加者の満足度は高い。
- 特に、「講座・ワークショップの内容」(63%)、「講師」(72%)、「劇場係員の対応」(63%)で満足度が高い(カッコ内は満足層の割合)。

④参加者が事業から得たもの(事業の効果)

[講座・ワークショップ]

- 04年度に実施した、講座・ワークショップ参加者を対象にしたアンケート調査の結果では、「人間関係に広がり生まれた」(67%)、「演劇やダンスに新たな興味が沸いた」(65%)、「劇場が身近になり、足を運ぶ回数が増えた」(57%)、「より多くの公演を鑑賞したいと思った」(50%)、「仕事や活動の幅、可能性が広がった」(43%)など多様な効果をあげている。
- グループインタビューでも、上記回答を裏付ける多くの意見が寄せられ、鑑賞事業だけでは得られないような深い効果を指摘する声が多かった。これらは、表面には現れにくい、劇場運営に伴うアウトカムである。
- 06年度の劇場使用者を対象としたグループインタビューの中でも、若手演劇人育成への取り組みは、参加者から大きな評価を得ている。

[学校との連携事業]

- 07年度に実施した小学校との連携事業に関するアンケート調査結果(※)でも、事業を経験した先生の約8割は、子どもたちの教育や学習態度などにプラスの効果があったと感じていることが明らかになった。

※全校調査:北九州市内公立小学校が対象、実施校対象:「表現教育推進事業」、
「学校出前演劇ワークショップ事業」を経験した先生が対象

- 特に、「自分の考えや気持ちを表現する力」(80%)、「豊かな感受性や想像力」(61%)、「人とコミュニケーションする力」(52%)について効果を実感している先生が多い。
- また、子どもたちだけではなく、先生自身も「子どもたちそれぞれの個性や能力をより理解できるようになった」(72%)などの効果や影響を感じている。
- 今後の連携の意向は、事業の実施経験のある実施校調査で明らかに高くなっている(実施校調査で連携の意向がある割合は83%)。
- 学校側の受け入れ体制、授業カリキュラムへの位置付け、学校側(先生も含む)の意識など課題も多い中、子どもと舞台芸術を結ぶ取り組みを進めるためには、長期的な視点で、まず事業の効果を実感する機会を増やしていくことが必要である。

A-5 市民文化活動支援(市民参加型事業、アマチュア支援など)

①ミッションに基づいた市民活動支援の実施

- 市民の文化活動支援については、創造事業や学芸事業と連携しながら、創造参加として

市民が舞台に立つ公演事業を実施しており、08年度は、「シアターラボ」、「シアターコラボ」、合唱物語「わたしの青い鳥」、「北九州パントマイムフェスティバル」の4事業で82回のアクティビティが実施された。

- 参加延人数・入場者数の合計は2,308人(受講(入場)者数でカウントすると134人)、公演はほぼ90%以上の高い入場率となっている。
- 「シアターラボ」、合唱物語「わたしの青い鳥」、「北九州パントマイムフェスティバル」は開館の03年度あるいは04年度から実施されている事業である。入場率も高く、市民に定着していることがうかがえる。

②プログラム参加者の満足度

- 04年度に実施した学芸調査のアンケート対象に、上記プログラム参加者も含む。普及系事業③(P.35)を参照されたい。

③貸館事業に関するサービス内容、質への評価(専門的・技術的なアドバイスやサービスなど)

- 貸館利用者を対象とするアンケート調査で専門的・技術的サービスに関わる項目をみると、「技術的な助言や援助は適切だった」は100%、「技術スタッフの対応はよかった」は99%と、満足層の割合は大変高い。関連する項目として、「舞台設備機器は充実していた」、「設備・機器などを安全に使用できた」、「舞台裏の施設等が使いやすかった」をみても、満足層の割合は90%以上となっている。これら項目では、「はい」という積極的な評価も高い。
- 劇場の専門的・技術サービスについては、利用者から高い信頼と評価を受けており、自由回答の書き込みも、それを裏付ける内容が多い。
(なお、09年度からテクニカルアドバイザーによるアドバイスを提供するなど、公演・講演に対する支援体制を強化。)

A-6 地域経済などへの波及効果

①他分野への貢献や地域活性化を視野に入れた戦略目標の有無と内容

- 北九州芸術劇場では、開館以前から「シアタープロジェクト」として小学校を中心としたアウトリーチに取り組み、継続的な活動を実施している。
- また、開館年度(03年度)から市内の延べ5つの区・市民センターを拠点に、ワークショップを通しての作品作りや小劇場でプロのスタッフを交えての成果発表を行ってきた「北九州ドラマ創作工房」を実施している(09年度から「エンゲキで私イキイキ、地域イキイキ」事業を立ち上げ、地域との連携を強化している)。

②学校等と連携したプログラム数と参加者数

- 08年度に、学芸事業の中で、学校や教育機関、福祉施設、区・市民センターで実施したアウトリーチプログラムは、「表現教育推進事業」、「北九州ドラマ創作工房」(+発表)、「学校出前演劇ワークショップ」など8事業。計363回のアクティビティを実施し、参加延人数・入場者数の合計は13,085人となっている(受講(入場)者数でカウントすると5,760人)。

③参加者の満足度

- 04年度に実施した学芸調査のアンケート回答者に、上記プログラム参加者も含む。普及系事業③(P.35)を参照されたい。

④地域外からの来場者割合

- 観客アンケート結果をみると、07年度以降、北九州市および近隣地域以外の地域(福岡市を初めとする九州各地、山口県など)からの来場者が増えており(06年度:21%、07年度:

31%、08年度:31%)、北九州市域以外でも、北九州芸術劇場の舞台芸術の鑑賞拠点としての認知度と評価が定着してきていることがうかがえる。

⑤公演鑑賞に伴う消費行動

- 観客アンケートから鑑賞前後のショッピングの消費行動をみると、08年度の飲食・ショッピングをしている人の割合は59%で、毎年ほぼ60%で推移している。
- 飲食をしている場合の平均金額は約1,600円、ショッピングの場合は5,500円となっている。

⑥経済波及効果

- 上記公演鑑賞に伴う消費行動も含めた08年度の経済波及効果を算出すると、最終需要は、劇場の運営管理:約7.1億円、主催事業:約3.2億円、主催事業の観客の消費支出:約1.8億円となっている。
- それらの経済波及効果は、約17.7億円である。
- また、データ収集の制約から参考値ではあるが、貸館事業に基づいた経済波及効果については、最終需要が約6.0～6.8億円、経済波及効果が約8.0～9.1億円である。
- 経済波及効果の誘発係数は、運営管理・主催事業・主催事業観客消費支出で1.46、貸館を含めると1.41となっている。試算を始めた04年度以降、運営管理・主催事業の誘発係数は1.45～1.47となっており、北九州芸術劇場の運営は、相応の経済波及効果をもたらしていることが明らかとなっている。
- 雇用効果については、就業者ベースで143～153人、雇用者ベースで123～131人という結果となっている。

A-7 地域アピール、ブランド力のアップ

①パブリシティ効果

- パブリシティ効果についてみると、北九州芸術劇場や劇場事業に関する08年度の記事掲載件数は149件である。開館年で話題性の高かった03年度を除き、04年度以降はおおよそ150件前後の記事が掲載されている。
- 新聞掲載記事を広告宣伝費に金額換算すると、08年度は約1億2,600万円となる。
- これは、市の事業に対する補助金約1億3,700万円に近い数字となっており、北九州芸術劇場の事業や運営は高いパブリシティ効果を生み出している。

②劇場・ホールの存在を肯定的に考えている住民の割合

- 05年度に実施した市民意識調査の結果では、劇場について、「これからの時代に必要な施設である」(46%)、「市の文化行政のシンボル」(35%)といった肯定的な意見が多い。また、北九州芸術劇場が開設された効果として、鑑賞機会や日常生活の中で芸術文化に触れる機会が増えたとする市民が多い。
- 一方で、「情報が限られており、どんなことをやっているのかわかりにくい」という意見も多い(44%)。
- 劇場スタッフへのインタビューでは、広い北九州市の中でどのように地域に劇場や舞台芸術を浸透させていくのか、劇場を応援してくれる市民をどのように増やしていくのか、今後の検討課題としてあがっている。
- 学芸(普及)事業の中での継続的な取り組みとともに、係の壁を越えた横断的な取り組みによる活動・事業の検討が必要だと考えられる。

A-8 広域施設としての役割発揮

※調査や評価の方法を含め、今後の検討課題である。

B. 運営管理

B-1 場の提供・支援(貸館事業)

①ミッションに基づいた貸館事業の実施

- 貸館事業については、「創る」「育つ」「観る」の劇場の運営方針と並んで、地域の創造力を高めるための「創造支援」として位置づける方向性となっている。

②貸館事業における入場者数

- 08年度の貸館の公演・講演事業数は206事業、306回の公演・講演公演が実施され、入場者数は164,556人となっている。

③利用者の満足度

- 貸館利用者を対象とした利用者調査結果では、劇場利用に関する総合的な満足度は98%で、利用者のほぼ全員が満足している。また、今後の利用意向も98%と高いことは、満足度の高さのあらわれといえよう。
- 具体的な項目をみても、スタッフの応対や説明などソフト面については、いずれも95%以上の満足度である。また、「はい」という積極的な評価の割合も高い。
- 05年度(利用者調査開始年度)以降、情報入手や利用問い合わせ、スタッフの対応など多くの項目で満足度は向上しており、利用者の苦情や要望に対する劇場スタッフの前向きな対応がうかがえる。
- 06年度の劇場使用者を対象としたグループインタビューの中でも、貸館で利用した団体の劇場の施設・設備、スタッフの応対やサービスに関する評価は高い。

B-2 施設のホスピタリティ・サービス

①公演や催し物情報に関する満足度

- 開館年度(03年度)に満足度が65%であった「公演情報の入手のしやすさ」は、04年度以降改善傾向が続き、08年度は86%(07年度:81%)とさらに上昇している。開館から6年が経過し、観客が劇場に慣れてきたこともあろうが、劇場側の情報発信への工夫や努力も大きいと思われる。

②ホスピタリティに関する満足度

- 03年度に満足度が73%であった「劇場の入口・案内表示のみやすさ」は、04年度以降改善傾向が続き、08年度は87%(07年度:82%)とさらに上昇している。劇場の導線については、複合施設ゆえの複雑さから、観客や利用者からわかりにくい、使いづらいといった意見が多くなっている。満足度の上昇は、①公演や催し物情報に関する満足度と同様に、開館から6年が経過し、観客が劇場に慣れてきたこともあろうが、案内表示の増設や既存サインの大型化など、劇場側の工夫によるところも大きいといえる。
- 「劇場やロビーのデザイン、雰囲気」は03年度から88%の高い満足度が少しずつ上昇し、08年度は95%となっている。

③スタッフの応対や電話応対等に関する満足度

- 03年度から満足度の高かった「劇場係員の応対」は、継続して高い満足度を保っており、08

年度も約97%と、満足層の割合はほぼ100%近い。また、「電話予約やチケットカウンターの対応」についても満足度は約95%で、劇場の顧客対応は高い評価を受けている。今後も高い満足度の維持に向けた取り組みが望まれる。

- 「チケットの予約・購入のしやすさ」は、03年度は53%と満足度項目のうち最も低かったが、04年度に73%に上昇、その後年々満足度は上昇し、08年度は90%となっている。

④ 飲食に関する満足度

- 劇場ロビーの飲食サービスの満足度は70%台後半で推移し、08年度は83%となっている。

B-3 施設の維持管理

① 施設の維持管理

- 貸館利用者を対象としたアンケート調査をみても、劇場の施設や設備などのハード面で高い満足度となっている。特に、「館内は清潔に保たれていた」、「ホワイエや客席などの雰囲気よかった」、「舞台設備・機器は充実していた」、「設備・機器などを安全に使用することができた」については、「はい」への回答がほぼ90%以上と大変高い評価となっている。また、05年度(利用者調査開始年度)以降、多くの項目で満足度は向上しており、劇場スタッフの努力がうかがえる。
- 技術部門へのグループインタビューでも、施設の維持管理が安心・安全な劇場利用に不可欠であること、そのための維持管理に細かく気を配っていることがうかがえる。また、グループインタビューでは、今後の検討事項として、中・大規模修繕に向けた計画検討があがっている。

② 稼働率

- 施設稼働率は、大ホールが75%、中劇場が78%、小劇場が84%である。
- 開館年の03年度を除き、3つのホールの稼働率は約70～80%で推移しており、(財)地域創造の悉皆調査結果(2007年9月1日時点でのデータ。専用ホールのうち政令市施設の平均稼働率は70%)と比較しても高い水準にある。

C. 経営

※C-1 経営体制、C-2 リサーチ&マーケティングについては、調査や評価の方法を含め、今後の検討課題である。

C-3 経営努力

① 外部資金、チケット収入の割合

- 北九州芸術劇場の08年度の事業費は約3億2,000万円。財源内訳をみると、チケット収入が全体の約42%、市の補助金が約42%、文化庁と(財)地域創造からの外部資金が約15%となっており、チケット収入、外部資金の割合ともに、全国平均の試算値(事業収入:37%、外部資金:11%)と比べて高い。

② 事業収支からみた経営努力

- 事業収支面でも、開館以来培ってきた交渉力や事業の効率性の向上、交通費や宿泊費に関する積極的な経費削減(団体割引の適用等)の努力が行われていることが数字からうかがえる。

3. 事業評価の結果から—今後の事業評価の方向性と検討課題

北九州芸術劇場の事業評価調査では、03年度の開館年度から図表6-2のと通りの調査を行ってきている。

図表6-2 北九州芸術劇場における実施調査

調査内容	03 年 度	04 年 度	05 年 度	06 年 度	07 年 度	08 年 度
【継続調査】						
劇場運営基礎データの収集・分析	→					
観客調査(アンケート)	→					
貸館利用者を対象としたアンケート調査 (実施:05年度～、整理・分析:07年度)			→			
経済波及効果の算出		→				
パブリシティ効果の把握	→					
【テーマ調査】						
専門家による座談会 (開場から1年間の劇場運営の成果について)		○				
市民意識調査(アンケート)			○			
ワークショップ参加者を対象とした学芸調査 (アンケート/グループインタビュー)		○				
学校を対象とした学芸調査(アンケート)					○	
(舞台芸術の公演による)劇場使用者へのグル ープインタビュー				○		
劇場スタッフへのグループインタビュー						○

今後事業評価を進めていくにあたっては、次の4点を検討・実施していくことが必要であると考えられる。

1つ目は、継続調査の実施である。経年変化による劇場運営、事業に関する満足度やニーズの分析のためにも、上記5つの継続調査を引き続き実施し、データや情報を蓄積することが望まれる。

2つ目は、劇場が地域や市民に与える波及効果や影響を把握するための、テーマ調査における定性調査の実施である。近年、劇場と地域との連携がより強く求められる中、①観客(あるいはチケットクラブ会員)、②創造事業や市民参加事業に参加した市民、③地域(市民センターなど)でのアウトリーチ事業参加者などを対象としたグループインタビューや聞き取り調査を行い、劇場運営や事業に関する詳細な意見、成果を把握する機会が必要であると考えられる。また、05年度の市民意識調査の実施から4年が経過していることから、今後長期的な視点での(5年後ごと、10年後ごと)調査の継続と、その手法も検討していく必要があるだろう。

3つ目は、劇場内部での事業評価結果の活用である。本年度の劇場スタッフへのグループインタビューからは、①本事業調査結果も含めて、劇場内で蓄積しているデータを有効に活用して

いくこと、②評価結果について、係を越えた情報共有や振り返りの機会を持つこと、が必要だという声が多かった。今後は、評価本来の目的である PDCA サイクル(Plan→Do→Check→Action)をより有効に機能させるためにも、事業評価調査の結果を現場での業務の振り返りに有効活用するとともに、データの収集や整理にあたって、スタッフの関わりを促していくことが必要であると考えられる。

そして4つ目がさらなる評価結果の発信である。北九州芸術劇場は、ホームページ上で劇場の運営方針を広く周知し、報告書(本編)をホームページで公開するなど、市民へのアカウントビリティに努めている。今後、評価結果も含め、劇場運営や事業の成果に関する市民への情報発信をより一層強化するとともに、市民からの意見を聴取するためのしくみづくりを検討していく必要があるだろう。

図表6-3 政策評価フレームに基づいた評価結果一覧

※この評価結果一覧は、(財)地域創造「公立ホール・公立劇場の評価指針」(平成19年3月)の評価フレームに基づき、北九州芸術劇場で03年度～08年度に実施した事業評価調査の結果を整理したものである。
 ※事業評価の結果を、定量評価(事業実績データ、アンケート調査データ)とともに、定性評価(グループインタビュー等)の結果も含めて総合的に整理した。
 ※「公立ホール・公立劇場の評価指針」の評価指標・基準を網羅することを目的とはせず、基本フレームを活用することにより、北九州芸術劇場の事業実績や運営の状況を、体系的に把握することを目的としている。
 ※したがって、「公立ホール・劇場の評価指針」の評価指標・基準とはすべてが一致するものではない。また、段階評価(達成度合いを自己点検できる解説式のモデル指標)項目については、劇場内部の自己評価であることから本報告書では掲載対象外とし、劇場スタッフへのグループインタビューで得られた意見を一部掲載している。

A:劇場の設置目的

評価大項目	評価指標・基準	調査結果・評価データ ※[]内は調査名・調査実施年度	評価結果・改善のポイント	事業評価に関する今後の課題
A-0 「創る」 「育つ」 「観る」	① 劇場の運営方針(ミッション)の有無と内容、ミッションの浸透の状況等	<ul style="list-style-type: none"> 劇場では、開館年度から「創る」「育つ」「観る」の3つを運営方針として設定。 [劇場スタッフへのグルイン/08]では、これらミッションは、劇場内で周知されている一方、日常の多忙な業務の中で一人一人が常にミッションを意識することは難しい現状もうかがえる。 	<ul style="list-style-type: none"> 3つの運営方針への支持率は、観客からも市民からも高い。今後も堅持するとともに、広く来場者や市民にも発信することが望まれる。 事業評価データ等を活用し、係を超えた振り返りの機会づくりが必要。 劇場をなくてはならない施設として位置付けていくためには、長期的な事業の継続が必要。 北九州市の人口(07年7月1日現在)は約98万7,000人であり、すでに人口を超える利用者が来場。 	<ul style="list-style-type: none"> 劇場内部での、事業評価結果を活用したPDCAサイクルの実現のための議論の場の設定、きっかけづくり。 観客調査の継続。 長期的な視点(5年ごと、10年ごとなど)での市民調査の検討、実施。 有効な定量的評価指標、定性的評価指標の検討。
	② 劇場の運営方針を支持する市民の割合(市民の支持率)	<ul style="list-style-type: none"> 運営方針への観客からの支持率は、「創る」「育つ」「観る」いずれについても、開館年(03年)度から90%以上。 ○08年度 創る:95%、育つ:93%、観る:99% [観客調査/08年度] 一般市民からの支持率も、「創る」「育つ」「観る」いずれについても80%以上。 ○創る:81%、育つ:90%、観る:90% [市民意識調査/05年度] ※支持率は、「ぜひやってほしい」+「まあやってほしい」の割合。無回答を除く。 ※割合(%)は小数点以下を四捨五入して掲載。 		
	③ 事業や運営に対する自己評価や振り返り、運営データの蓄積	<ul style="list-style-type: none"> 業務の振り返り、データを蓄積・活用して評価や業務にフィードバックしていくことが必要だという認識が高い。 [劇場スタッフへのグルイン/08年度] 		
	④ 市民の劇場の認知度や劇場への意見	<ul style="list-style-type: none"> 市民の劇場の認知度(劇場があることを「知っている」と回答した割合)は84%、知っている場合の来場・利用率は44%、来場したことがない場合の今後の来場意向は69%。 [市民意識調査/05年度] 劇場に来場経験を持つ市民を増やすこと、劇場の存在を肯定的に考えてくれる市民を増やすことは、劇場スタッフへのグルインでも、業務を超えた共通の問題意識。 [劇場スタッフへのグルイン/08年度] 		
	⑤ 劇場の来場者(利用者)数	<ul style="list-style-type: none"> 年間来場者(利用者)数は、05年度以降、毎年27～28万人で推移。08年度は1年間で27万9,000人、開館からの6年間で延べ165万人が来場。 		
A-1 「観る」 観る楽しさを知ってもらうため、舞台芸術の先進都市からエンターテイメント性や芸術性の高い作品を招き、市民にさまざまな公演を提供します	① ミッションに基づいた鑑賞系事業の実施	<ul style="list-style-type: none"> 中劇場を中心とした小劇場・現代演劇、話題性の高いダンス・現代舞踊のほか、ミュージカル・商業演劇など幅広いラインナップの公演事業を実施。 多様な年齢層、多様な鑑賞経験を持つ観客が来場。 ○年齢層 29歳未満:20%、30歳代:23%、40歳代:21%、50歳代:20%、60歳以上:16% 平均年齢:43歳。 ○北九州芸術劇場での鑑賞経験 今日が初めて:23%、1～2回:16%、3～5回:22%、6回以上:33% 6回以上は年々増加 06年度:24% ⇒ 07:25% ⇒ 08:33% 北九州市域外(北九州市内+北九州近隣地域を除く)からの観客も増加。06年度:21% ⇒ 07:31% ⇒08:31% [観客調査/08年度] 	<ul style="list-style-type: none"> 小劇場・現代演劇を中心に、幅広い事業構成で、多様な年齢層、多様な鑑賞経験を持つ観客を集客。 入場率も82%以上を確保。 北九州市域外からの観客も増加しており、九州の鑑賞拠点として、劇場が認知・評価されている。 「観る」に対する観客・市民の支持率、公演内容に関する観客の満足度も極めて高いことから、今後もこの基本方針の継続が望まれる。 劇場使用者(カンパニーや劇団を対象、06年度実施)へのグループインタビューや専門家へのインタビュー(04年度)でも概ね高評価。 	<ul style="list-style-type: none"> 観客調査の継続。 観客の意識やニーズを詳細に把握するための調査の実施 有効な定量的評価指標、定性的評価指標の検討。
	② 年間延べ観客数	<ul style="list-style-type: none"> 08年度は、自主事業については、15事業、公演回数は33回、入場者数は18,164人である。入場率は85%。 創造事業、共催・提携事業、演劇フェスティバルも含めた鑑賞系事業全体では、34事業、公演回数は114回、入場者数は36,068人である。入場率は83% 		
	③ 公演に対する観客の満足度	<ul style="list-style-type: none"> 開館年から「公演内容」への満足度の高さが顕著。満足層の割合は97%、「たいへん満足」の割合も52%と半数以上を占める。 「公演のチケット料金」への満足度も高く、「公演内容」への評価の高さが「公演のチケット料金」の満足度にも反映していると考えられる。 満足層の割合 ○公演内容 03年度:96% ⇒04:96% ⇒05:97% ⇒06:97% ⇒ 07:98% ⇒08:97% ○公演のチケット料金 03年度:86% ⇒04:88% ⇒05:92% ⇒06:90% ⇒ 07:92% ⇒08:93% ※満足層の割合は、「たいへん満足」+「まあ満足」の割合。無回答を除く。 [観客調査/08年度] 		
	④ 鑑賞系事業による芸術団体やアーティストからの評価	<ul style="list-style-type: none"> 公演事業での劇場使用者からも、劇場の運営方針や実施事業への支援の声、期待の声が大きい。 特に、劇場スタッフの対応については、人間関係・信頼関係が作れる劇場であるとの評価が高い。 [劇場使用者を対象としたグルイン/06年度] 		

評価大項目	評価指標・基準	調査結果・評価データ ※[]内は調査名・調査実施年度	評価結果・改善のポイント	事業評価に関する今後の課題
<p>A-2</p> <p>【創造系事業】</p> <p>「創る」 北九州芸術劇場のオリジナル・プロデュースの演劇作品を創ることにより、「ものづくりの街」北九州市をアピールし地域の活性化を促していきます</p>	<p>① ミッションに基づいた創造系事業の実施</p> <p>② 年間延べ観客数</p> <p>③ 創造系事業の公演に対する観客の満足度</p> <p>④ 創造系事業による芸術団体やアーティストへの効果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・全国発信型、地元演劇人の育成型、市民参加型などの多様な事業が実施されている。開館当初から継続して実施されている事業に新規企画事業を加えながら、効果的に事業を展開している。 ・「A MIDNIGHT SUMMER DREAM」、「風街」のプロデュース作品は、東京と大阪で公演を実施。(計14回の公演を行い、7,220人が来場)。 ・08年度は、8事業で41回の公演が行われ、入場者は12,320人。入場率は平均で82%。 ・「シアターラボ」、「パントマイムフェスティバル」、「シアターコラボ」の入場率は90%以上。「リーディングセッション」と合唱物語「わたしの青い鳥」もともに89%。 ・鑑賞系事業③を参照 ・北九州・福岡の若手劇団・カンパニーから、「劇団相互、あるいは北九州・福岡の連携が強まった」、「プロデュース事業等に関わることで役者や劇団のレベルアップになった」と評価。[劇場使用者を対象としたグルイン/06年度] 	<ul style="list-style-type: none"> ・全国発信型、地元演劇人の育成型、市民参加型などの多様な事業を実施し、高い入場率を確保。市民に事業が定着していること、地域からの注目度の高さがうかがえる。 ・「創る」に関する観客および市民の支持率は高く、今後もこの基本方針の継続が望まれる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・観客調査の継続。 ・創造系事業参加者の意識・満足度・ニーズ把握のための調査の実施。 ・有効な定量的評価指標、定性的評価指標の検討。
<p>A-3 A-4</p> <p>【普及系事業】</p> <p>「育つ」 アーティストを小・中学校等に派遣するアウトリーチ活動や劇場サポーター組織を通じてのヒューマンネットワーク作り等により、舞台芸術の手法を用いた人材育成・教育普及事業を行い、地域を育てながら地域とともに育っていく劇場を目指します</p>	<p>① ミッションに基づいた普及系事業の実施</p> <p>② 年間の事業数、アクティビティの回数、参加人数</p> <p>③ 講座・ワークショップ参加者の満足度</p> <p>④ 参加者が事業から得たもの(事業の効果) - 講座・ワークショップ</p> <p>④ 参加者が事業から得たもの(事業の効果) - 学校との連携事業</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・開館以前から「シアタープロジェクト」として小学校を中心としたアウトリーチに取り組み、劇場内には学芸係を設置し、継続的な事業を実施。 ・08年度も、 <ul style="list-style-type: none"> ○ワークショップや講座事業型の事業として、「バックステージツアー」、「チャレンジ！えんげき」、「劇場塾」、「高校生のための演劇塾」など ○アウトリーチ事業として、小学校での「表現教育推進事業」や「学校出前演劇ワークショップ」、中学生と指導者を対象とした「演劇ネットワーク事業」など学校を対象とした事業と、ダンスや演劇のワークショップなど ○創造参加として、「シアターラボ」、「シアターコラボ」、合唱物語「わたしの青い鳥」、「北九州パントマイムフェスティバル」などの多様なプログラムを実施。 ・08年度は、18事業、279回のアクティビティが実施され、参加延人数・入場者数の合計は10,577人。 ※受講(入場)者数でカウントすると4,382人 ・講座・ワークショップ参加者の事業に関する評価はたいへん高い。[学芸調査・アンケート/04年度] <ul style="list-style-type: none"> ○参加者の講座やワークショップに対する総合的な満足度 満足層:98%、うち「たいへん満足」:56% ○「たいへん満足」の割合が高い項目 講座・ワークショップの内容(63%)、講師(72%)、劇場係員の応対(63%) ・講座やワークショップに参加したことで、参加者は次のような効果があったと感じている。[学芸調査・アンケート/04年度] <ul style="list-style-type: none"> 「人間関係に広がり生まれた」(67%)、「演劇やダンスに新たな興味がわいた」(65%)、「劇場が身近になり、足を運ぶ回数が増えた」(57%)、「より多くの公演を鑑賞したいと思った」(50%)、「仕事や活動の幅、可能性が広がった」(43%)など。 ・グループインタビューでも、鑑賞事業だけでは得られない深い効果を指摘する声が多い。[学芸調査・グルイン/04年度] ・学校との連携事業への評価 [小学校を対象としたアンケート調査/07年度] <ul style="list-style-type: none"> ○事業経験者の約8割は、演劇を活用した事業が子どもたちに与える効果を実感。 ○具体的には、 <ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えや気持ちを表現する力:80% ・豊かな感受性や想像力:61% ・人とコミュニケーションする力:52% については、効果を実感している先生が多い。 ○先生自身も「子どもたちそれぞれの個性や能力をより理解できるようになった」(72%)等の効果を実感。 ○事業をした先生で、今後の劇場との連携の意向も高い(連携したいと思う割合:83%)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「育つ」に対する観客および市民の支持率は高く、今後もこの基本方針の継続が望まれる。 ・ワークショップや講座参加者の事業に対する満足度は極めて高く、参加したことで鑑賞活動や日常生活の中に多様な効果が生まれている。 ・学校との連携事業については、演劇を活用した事業が子どもたちの表現力やコミュニケーション力への効果に期待が高い。長期的な視点で、まず事業の効果を立証するデータや情報を整理することが重要。 	<ul style="list-style-type: none"> ・事業参加者、関係する地域・施設等を対象とした意識・満足度・ニーズ把握のための調査の実施。 ・有効な定量的評価指標、定性的評価指標の検討。

評価大項目	評価指標・基準	調査結果・評価データ ※[]内は調査名・調査実施年度	評価結果・改善のポイント	事業評価に関する今後の課題
A-5 [市民文化活動支援] 市民参加型事業、貸館事業におけるアマチュア支援など	① ミッションに基づいた市民活動支援の実施 ② プログラム参加者の満足度 ③ 貸館事業に関するサービス内容、質への評価（専門的・技術的なアドバイスやサービスなど）	<ul style="list-style-type: none"> 市民の文化活動支援については、創造事業や学芸事業と連携しながら、創造参加として市民が舞台に立つ公演事業を実施。 08年度は、創造参加として、「シアターラボ」、「シアターコラボ」、合唱物語「わたしの青い鳥」、「北九州パントマイムフェスティバル」の4事業で82回のワークショップが実施された。参加延人数・入場者数の合計は2,308人。「シアターコラボ」は08年度からの新事業。その他の3事業は、03年度あるいは04年度からの継続事業。 普及系事業③を参照 貸館利用者への専門的・技術的アドバイスについては、「技術的な助言や援助は適切だった」は100%、「技術スタッフの対応はよかった」は99%の大変高い満足度。 関連する項目として、「舞台設備機器は充実していた」、「設備・機器などを安全に使用できた」、「舞台裏の施設等が使いやすかった」も、それぞれ90%以上の高い満足度。 [貸館調査/08年度] 	<ul style="list-style-type: none"> 市民参加型事業には継続事業が多く、市民からの支持がうかがえる。 貸館事業における専門的、技術的支援については、ほぼ100%の高い評価。 	<ul style="list-style-type: none"> 貸館調査の継続。 市民参加型事業、アマチュア支援に関する調査手法の検討。
A-6 [地域経済などへの波及効果]	① 他分野への貢献や地域活性化を視野に入れた戦略目標の有無と内容 ② 学校等と連携したプログラム数と参加者数 ③ 参加者の満足度 ④ 地域外からの来場者割合 ⑤ 公演鑑賞に伴う消費行動 ⑥ 経済波及効果	<ul style="list-style-type: none"> 北九州芸術劇場では、開館以前から「シアタープロジェクト」として小学校を中心としたアウトリーチに取り組み、継続的な活動を実施。 開館年度(03年度)から市内の延べ5つの区・市民センターを拠点に、「北九州ドラマ創作工房」を実施している(09年度から「エンゲキで私イキイキ、地域イキイキ」事業を立ち上げ、地域との連携を強化)。 08年度に、学芸事業の中で実施したアウトリーチプログラムは、「表現教育推進事業」、「北九州ドラマ創作工房」(+発表)、「学校出前演劇ワークショップ」など8事業。計363回のアクティビティを実施し、参加延人数・入場者数の合計は13,085人。 普及系事業③を参照 07年度以降、北九州市および近隣地域以外の地域(福岡市を初めとする九州各地、山口県など)からの来場者が増加。 06年度:21% ⇒07:31% ⇒08:31% [観客調査/08年度] 地域外からの来場者は、従来はダンス・現代舞踊が多かったが、07年度以降はミュージカル・商業演劇、古典芸能など多様なジャンル・多様な年齢層で増加傾向。 鑑賞前後のショッピングの消費行動をみると、08年度の飲食・ショッピングをしている人の割合は59%。毎年ほぼ60%で推移。 飲食をしている場合の平均金額は約1,600円、ショッピングの場合は約5,500円。 [観客調査/08] 08年度の経済波及効果を算出すると、 ○最終需要 劇場の運営管理:約7.1億円、主催事業:約3.2億円、主催事業の観客の消費支出:約1.8億円 (参考値)貸館事業に基づいた最終需要:約6.0~6.8億円 ※試算 ○経済波及効果 約17.7億円 (参考値)貸館事業に基づいた経済波及効果:約8.0~9.1億円 ※試算 経済波及効果の誘発係数は、 ○運営管理・主催事業・主催事業観客消費支出:1.46 ○貸館を含めた消費支出:1.41 04年度以降、運営管理・主催事業の誘発係数は、事業規模により1.45~1.47で推移。 雇用効果は、就業者ベースで143~153人、雇用者ベースで123~131人。 	<ul style="list-style-type: none"> 北九州市域外からの来場者が増加していることは、舞台芸術の鑑賞拠点としての北九州芸術劇場の認知度、評価が向上しているものと考えられる。 観劇に伴う観客の消費活動も活発。劇場の事業規模に応じた経済効果が発生している。 今後、集客のためにも、より劇場と地域(北九州の街、近隣商店街、大学等)との連携を深めるための、積極的な方策の検討が望まれる。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域(地域経済)への波及効果の測定手法、評価項目の検討。 継続調査の実施、精度アップ(劇場管理運営費、事業費の振り分け、観客消費支出の精度アップ)。 所得増、雇用増、税収増の試算。 貸館事業に伴う経済波及効果の精度アップ(貸館事業者、貸館事業観客へのアンケート調査)。

評価大項目	評価指標・基準	調査結果・評価データ ※[]内は調査名・調査実施年度	評価結果・改善のポイント	事業評価に関する今後の課題
A-7 【地域アピール、ブランド力のアップ】	① パブリシティ効果	<ul style="list-style-type: none"> 北九州芸術劇場や劇場事業に関する08年度の記事掲載件数は149件。 開館年で話題性の高かった03年度を除き、04年度以降はおおよそ150件前後の記事が掲載。 149件の新聞掲載記事を広告宣伝費に金額換算すると、08年度は約1億2,600万円(07年度:約1億1,000万円)「A MIDONIGHT SUMMER DREAM」、「風街」、「ガラスの仮面」等の公演については、全国紙、北九州以外の地方紙でも紹介。 07年度以降は、換算金額は減少しているものの、自主事業を中心に、毎月コンスタントに記事が掲載され、件数を維持している。 	<ul style="list-style-type: none"> 毎月コンスタントに掲載されていること、全国紙・地方紙でも事業が紹介されていることなど、劇場事業の定着と広がり进行评估。 	<ul style="list-style-type: none"> より精緻なパブリシティ効果の測定手法、および劇場の情報発信力を把握する評価手法の検討。
	② 劇場・ホール存在を肯定的に考えている住民の割合	<ul style="list-style-type: none"> 市民調査では、「これからの時代に必要な施設である」(46%)、「市の文化行政のシンボル」(35%)といった肯定的な意見への回答割合が高い。 劇場開設の効果として、鑑賞機会や日常生活の中で芸術文化に触れる機会が増えたとする市民が多い。 一方で、「情報が限られており、どんなことをやっているのかわかりにくい」という意見も多い(44%)。[市民意識調査/05年度] 劇場スタッフのインタビューでは、広い北九州市の中でどのように地域に劇場や舞台芸術を浸透させていくのか、劇場を応援してくれる市民をどのように増やしていくのかが、今後の検討課題としてあがっている。[劇場スタッフへのグルイン/08年度] 	<ul style="list-style-type: none"> 市の事業に対する補助金(約1億3,700万円)に近い数字となっており、北九州芸術劇場の事業や運営は高いパブリシティ効果を生み出している。 北九州芸術劇場に関して、肯定的な意見が多いことは高く評価。一方、広い北九州市域の中で、劇場や劇場事業に関する情報をいかに市民に届けるかが検討課題。 	<ul style="list-style-type: none"> 長期的な視点(5年ごと、10年ごとなど)での市民調査の検討、実施。 市民の劇場への意識・ニーズをより詳細に把握するための評価手法の検討。

※A-8 広域施設としての役割発揮は、調査や評価の方法を含め、今後の検討課題である。

B: 運営管理

評価大項目	評価指標・基準	調査結果・評価データ ※[]内は調査名・調査実施年度	評価結果・改善のポイント	事業評価に関する今後の課題	
B-1	[場の提供・支援 (貸館事業)]	① ミッションに基づいた貸館事業の実施	<ul style="list-style-type: none"> 貸館事業については、「創る」「育つ」「観る」の劇場の運営方針と並んで、地域の創造力を高めるための「創造支援」として位置づける方向性。 	<ul style="list-style-type: none"> 総合的な満足度、今後の利用意向ともに98%であることは、利用者からの大きな評価。 貸館事業のソフトに関する評価は大変高く、今後もこのサービス内容・質の維持が望まれる。 	<ul style="list-style-type: none"> 貸館調査の継続。 利用者の満足度に関する定量的評価指標、定性的評価指標の検討。
		① 貸館における入場者数	<ul style="list-style-type: none"> 08年度の貸館公演・講演は206事業。計306回の公演・講演が行われ、入場者数は164,556人。 		
		② 利用者の満足度	<ul style="list-style-type: none"> 劇場利用に関する総合的な満足度は98%。今後の利用意向も98%と満足度はたいへん高い。 ソフトに関する9項目のうち、「開館時間が適当である」以外は、満足層の割合が95%以上。貸館事業におけるスタッフの対応への評価は高い。 [貸館調査/08年度] 		
B-2	[施設のホスピタリティ・サービス]	① 公演や催し物情報に関する満足度	<ul style="list-style-type: none"> 開館年度(03年度)に満足度が低かった「公演情報の入手のしやすさ」は、04年度以降改善傾向が続き、08年度には80%以上の満足度となっている。 ○公演情報の入手のしやすさ 03年度:65% ⇒04:73% ⇒05:78% ⇒06:79% ⇒ 07:81% ⇒08:86% [観客調査/08年度] 	<ul style="list-style-type: none"> 高い満足度は堅持し、低い満足度は大きく改善している。開館から6年が経過し、観客が劇場や鑑賞活動に慣れてきたこともあろうが、劇場側の工夫と努力が大きいと考えられる。 劇場のホスピタリティ・サービスに関する評価は大変高く、今後もこのサービス内容・質の維持が望まれる。 	<ul style="list-style-type: none"> 観客調査の継続。 観客の意識・満足度・ニーズ把握に関する定量的評価指標、定性的評価指標の検討。
		② ホスピタリティに関する満足度	<ul style="list-style-type: none"> 開館年度に満足度が73%であった「劇場の入口・案内表示のみやすさ」は、04年度以降改善傾向が続き、08年度は87%に上昇。 「劇場やロビーのデザイン、雰囲気」は03年度から88%の高い満足度が少しずつ上昇し、08年度は95%。 ○案内表示 03年度:73% ⇒04:74% ⇒05:77% ⇒06:79% ⇒ 07:82% ⇒08:87% ○デザイン・雰囲気 03年度:88% ⇒04:91% ⇒05:93% ⇒06:93% ⇒ 07:94% ⇒08:95% [観客調査/08年度] 		
		③ スタッフの対応や電話応対等に関する満足度	<ul style="list-style-type: none"> 「劇場係員の対応」、「電話予約やチケットカウンターの対応」への満足度は大変高い。特に、「劇場係員の対応」については、開館年度から90%以上の満足度を維持している。 開館年度(03年度)に満足度が低かった「チケットの予約・購入のしやすさ」は、04年度以降改善傾向が続き、08年度には80%以上の満足度となっている。 ○劇場係員の対応 03年度:92% ⇒04:97% ⇒05:98% ⇒06:97% ⇒ 07:97% ⇒08:97% ○電話・チケットカウンター 03年度:80% ⇒04:91% ⇒05:93% ⇒06:92% ⇒ 07:93% ⇒08:95% ○チケットの予約購入 03年度:53% ⇒04:73% ⇒05:79% ⇒06:80% ⇒ 07:83% ⇒08:90% [観客調査/08年度] 		
		④ 飲食に関する満足度	<ul style="list-style-type: none"> 劇場ロビーの飲食サービスの満足度は70%台後半で推移し、08年度は83%である。 ○飲食サービス 03年度:69% ⇒04:78% ⇒05:79% ⇒06:77% ⇒ 07:80% ⇒08:83% [観客調査/08年度] 		
B-3	[施設の維持管理]	① 施設の維持管理	<ul style="list-style-type: none"> 貸館調査でも、劇場の施設や設備などハード面で利用者からの満足度は大変高いが、搬入・搬出のしやすさについては複合施設でエレベーターを使用することから、他の項目に比べて満足度は低い。満足層の割合は次のとおり。 ○館内は清潔に保たれていた:100% ○舞台設備・機器は充実していた:99% ○設備・機器などを安全に使用できた:99% ○楽屋など舞台裏の施設が使いやすかった:94% ○搬入・搬出がやりやすかった:87% [貸館調査/08年度] 	<ul style="list-style-type: none"> 劇場利用者からの施設・設備の維持管理に関する評価は大変高く、今後も安心・安全な施設利用への取り組みが望まれる。 スタッフからは、中長期の修繕計画が課題としてあげられている。 	<ul style="list-style-type: none"> 貸館調査の継続。 利用者の評価に関する定量的評価指標、定性的評価指標の検討。 施設の維持管理に関する詳細調査の検討。
		② 稼働率	<ul style="list-style-type: none"> 施設稼働率は、大ホールが75%、中劇場が78%、小劇場が84%である。 開館年の03年度を除き、3つのホールの稼働率は約70~80%で推移。全国平均(専用ホールのうち政令市施設の平均稼働率は70%)と比較しても高い水準。 		

C: 経営

評価大項目	評価指標・基準	調査結果・評価データ ※[]内は調査名・調査実施年度	評価結果・改善のポイント	事業評価に関する今後の課題
<p>C-3</p> <p>[経営努力]</p>	<p>① 外部資金、チケット収入の割合</p> <p>② 事業収支からみた経営努力</p>	<ul style="list-style-type: none"> 08年度事業費は約3億2,200万円。財源内訳は、チケット収入:約1億3,600万円(42%)、外部資金:約5,000万円(15%)、市の補助金:約1億3,700万円(42%)。 チケット収入と外部資金の03年度からの比率をみると次のとおり。 <ul style="list-style-type: none"> ○チケット収入 03年度:54%、04:43%、05:37%、06:61%、07:52%、08:42% ○外部資金 03年度:18%、04:20%、05:22%、06:14%、07:14%、08:15% 全国平均の試算値と比較すると、チケット収入割合(全国平均:37%)、外部資金割合(同:11%)ともに、平均を上回る。 08年度の文化振興特別会計の収入の部の決算報告では、予算額と決算額の差は、事業収入で約1億3,300万円、補助金収入で約4,200万円。運営や事業の実施にあたっての経費削減、営業努力がうかがえる。 	<p>・チケット収入、外部資金の割合の高さなど、劇場の営業努力、運営努力の成果として評価。</p>	<p>・継続したデータ収集・分析の実施。</p> <p>・詳細調査の必要性の検討、実施。</p>

※C-1 経営体制、C-2 リサーチ&マーケティングについては、調査や評価の方法を含め、今後の検討課題である。